

第3回

乳幼児の父親についての調査 速報版

● 調査について ●

ベネッセ教育総合研究所では、0歳から6歳（就学前）までの子どもを持つ父親を対象に、子どもとかわる様子、家族との関係、仕事と家庭のバランスなど、乳幼児を持つ父親の家庭生活の実態や子どもや家族に対する意識をとらえることを目的にアンケート調査を実施しました。

第1回（2005年）調査・第2回（2009年）調査と第3回（2014年）調査を比較することにより、経年での変化をとらえることができます。この調査が、子育て支援や、よりよいワークライフバランスのあり方を探っていく際の手がかりとなれば幸いです。

● 目 次 ●

子ども、子育てへのかかわり

- 出産への立ち会い
- 出産後4か月に父親が取り組んだこと
- 子どもと一緒に過ごす時間
- 家事・育児のかかわりと理想

父親の育児観

- 子育てで力を入れたいこと
- 子どもの将来像について
- 理想的な父親のイメージ
- 父親としての将来の不安
- 子育て意識
- 家事・育児の自己評価、満足度

家族・周囲とのかかわり

- 妻とのかかわり
- 周囲の人との関係
- 祖父母からの支援
- 子育てについて話せる友人

ワークライフバランス

- 出産前後の休暇について
- 両立支援制度について
- 父親の職場環境
- 趣味や勉強、地域の中での活動

調査から見てきたこと

調査概要

1 調査テーマ・調査内容

父親の子育ての実態、子育て観、仕事と家庭のバランス、家族との関係など。

2 調査方法

インターネット調査

3 調査対象

【2014年調査（第3回調査）】

首都圏の0歳から6歳（就学前）の乳幼児を持つ父親 2,645名（20～49歳）

【2009年調査（第2回調査）】

首都圏の0歳から6歳（就学前）の乳幼児を持つ父親 4,574名（20～45歳）

【2005年調査（第1回調査）】

首都圏の0歳から6歳（就学前）の乳幼児を持つ父親 2,956名（20～45歳）

※首都圏は東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県。

※第2回、第3回調査では、比較群として地方部でも調査を行った。
この速報版では全体数値には含めていない。

4 調査項目

子どもとしかかわる時間（平日・休日）／家事・育児の実態と希望／配偶者の就業状況／配偶者とのかかわり／子育てストレス／子育ての将来への不安／育児休業制度の活用実態 など

分析の枠組みとサンプル数

2005年調査（首都圏父親 2,956名）

0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
429	468	468	471	489	481	150

2009年調査（首都圏父親 4,574名）

0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
721	721	721	721	721	721	248

2014年調査 全体（首都圏父親 2,645名 ※49歳までの父親。）

0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
412	412	412	412	412	412	173

2014年調査 経年比較用（首都圏父親 2,398名 ※2005年調査、2009年調査と同様、45歳以下の父親のみ抽出。）

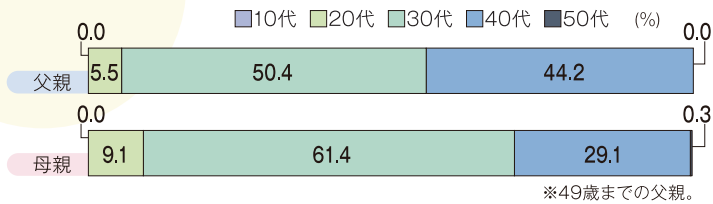
0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
390	388	371	370	367	364	148

速報版を読む際の注意点

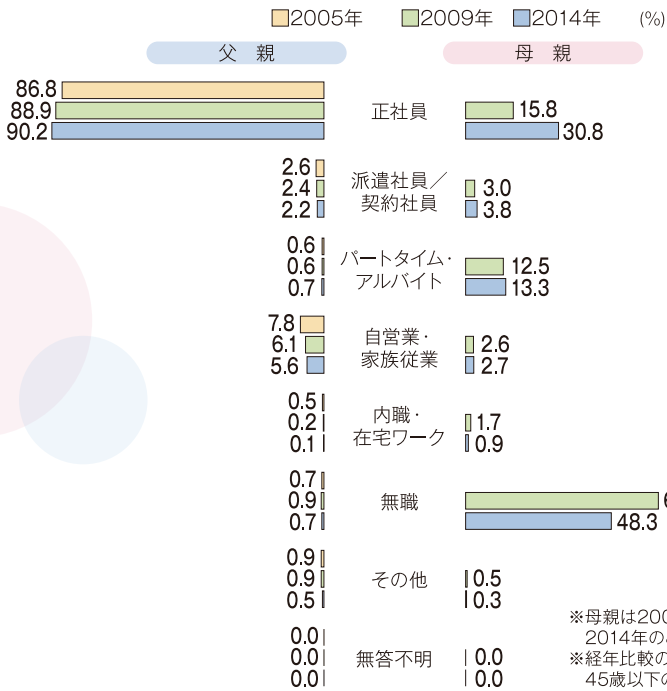
本速報版の百分率（%）は有効回答数のうち、設問に該当する回答者を母数として算出し、小数第2位を四捨五入して表示した。
その結果、各々の項目の数値の和と合計を示す数値とが一致しない場合がある。

基本属性

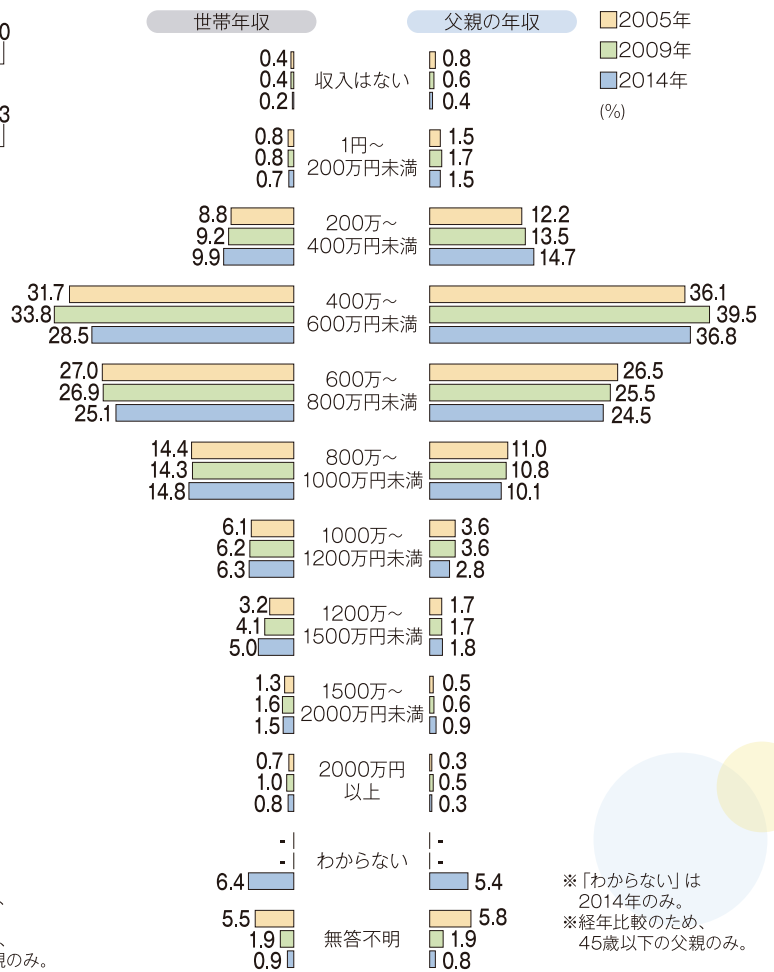
年齢 (2014年)



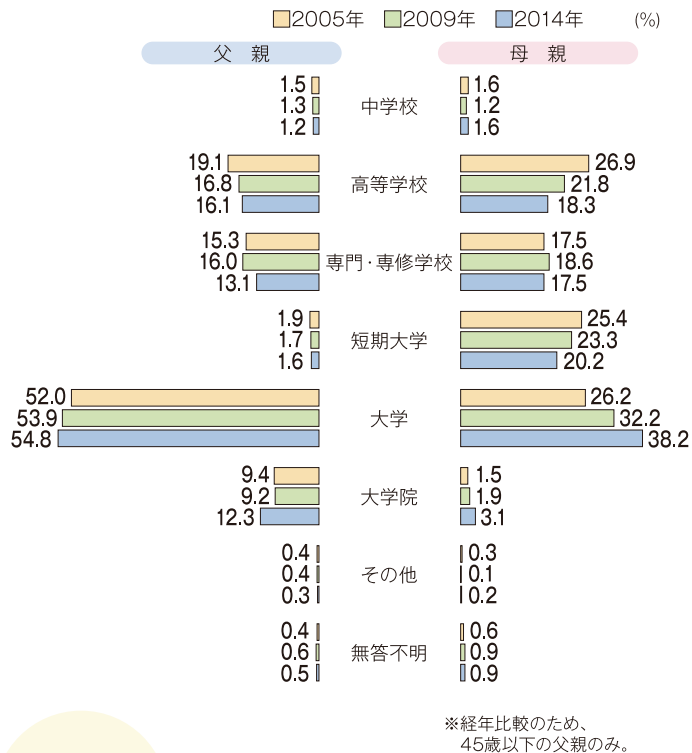
現在の職業 (経年比較)



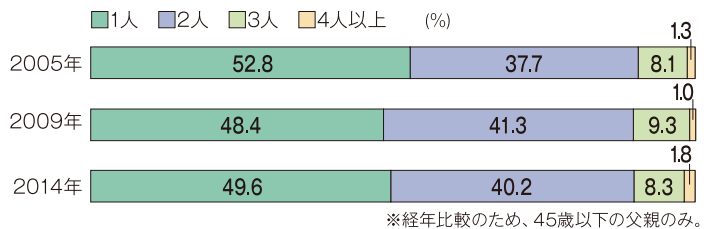
世帯年収・父親の年収 (経年比較)



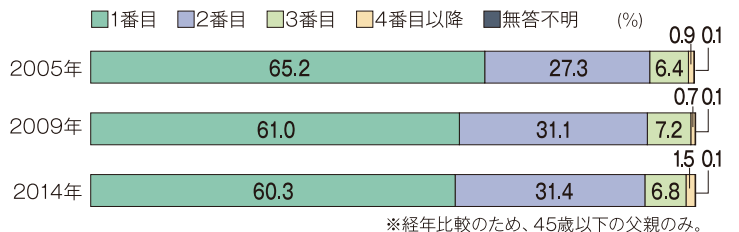
最終学歴 (経年比較)



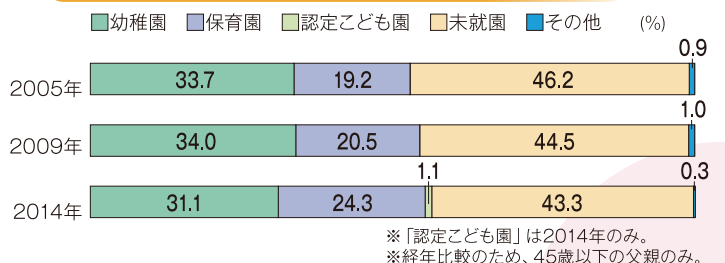
子どもの数 (経年比較)



対象の子どもの出生順位 (経年比較)



対象の子どもの就園状況 (経年比較)



子ども、子育てへのかかわり

父親の育児観

家族・周囲とのかかわり

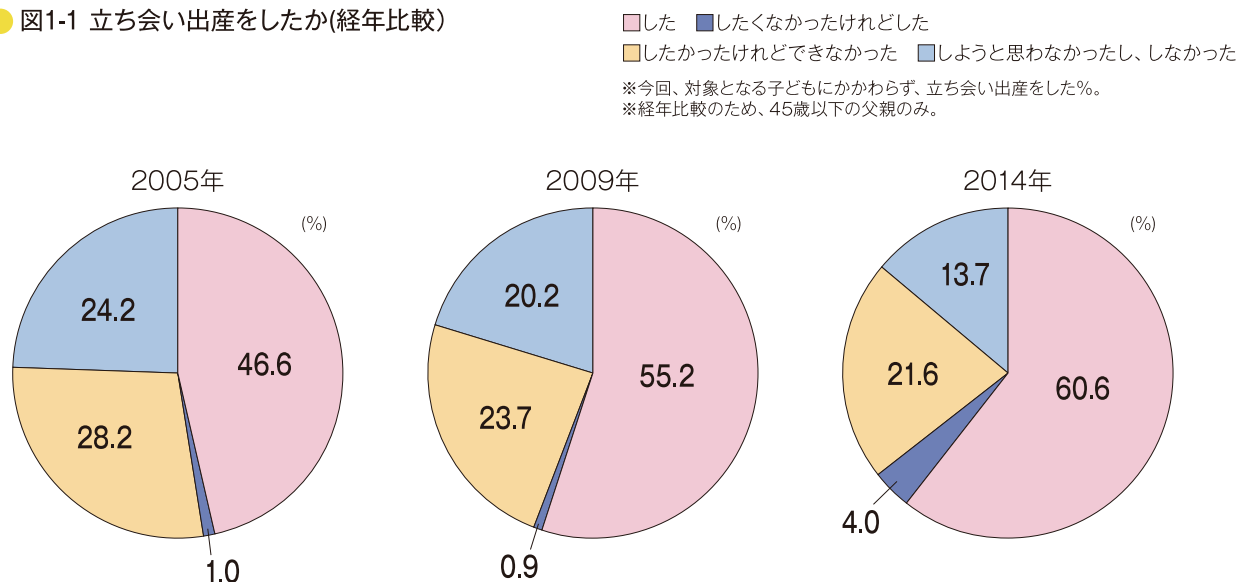
ワークライフバランス

出産への立ち会い

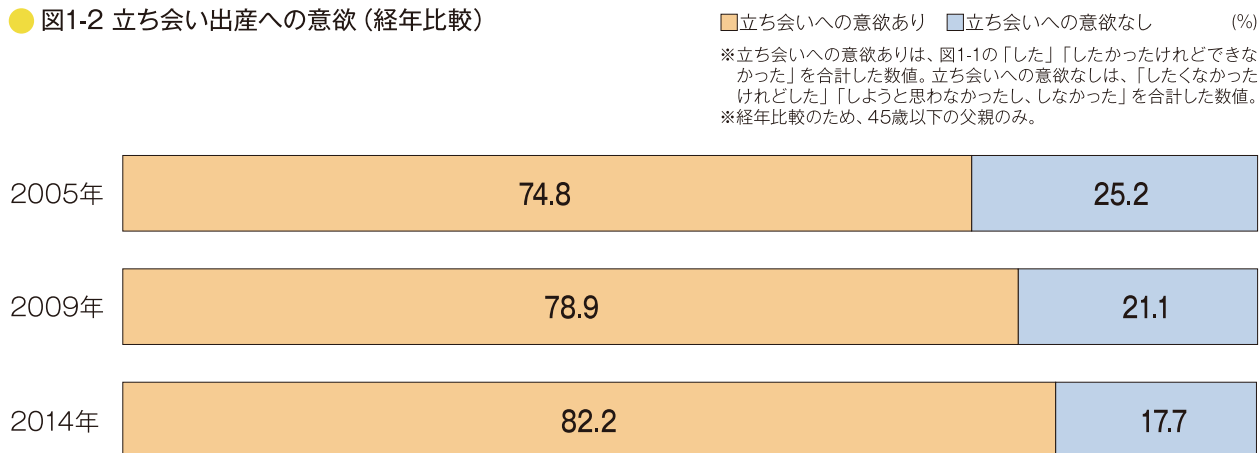
出産の立ち会いは、経年で増加し、2014年では6割を超えた。
 出産の立ち会いへの意欲も増加し、2014年では8割を超えた。

Q あなたは親として子どもの出産に立ち会いましたか。

● 図1-1 立ち会い出産をしたか(経年比較)



● 図1-2 立ち会い出産への意欲(経年比較)



父親が出産に立ち会った比率(「した」「したくなかったけれどした」)は2005年47.6%、2009年56.1%、2014年64.6%と、9年間で17ポイント増加した。また、出産の立ち会いへの意欲(「した」「したかったけれどできなかった」)は2005年74.8%、2009年78.9%、2014年82.2%と増加し、2014年では8割を超えた。

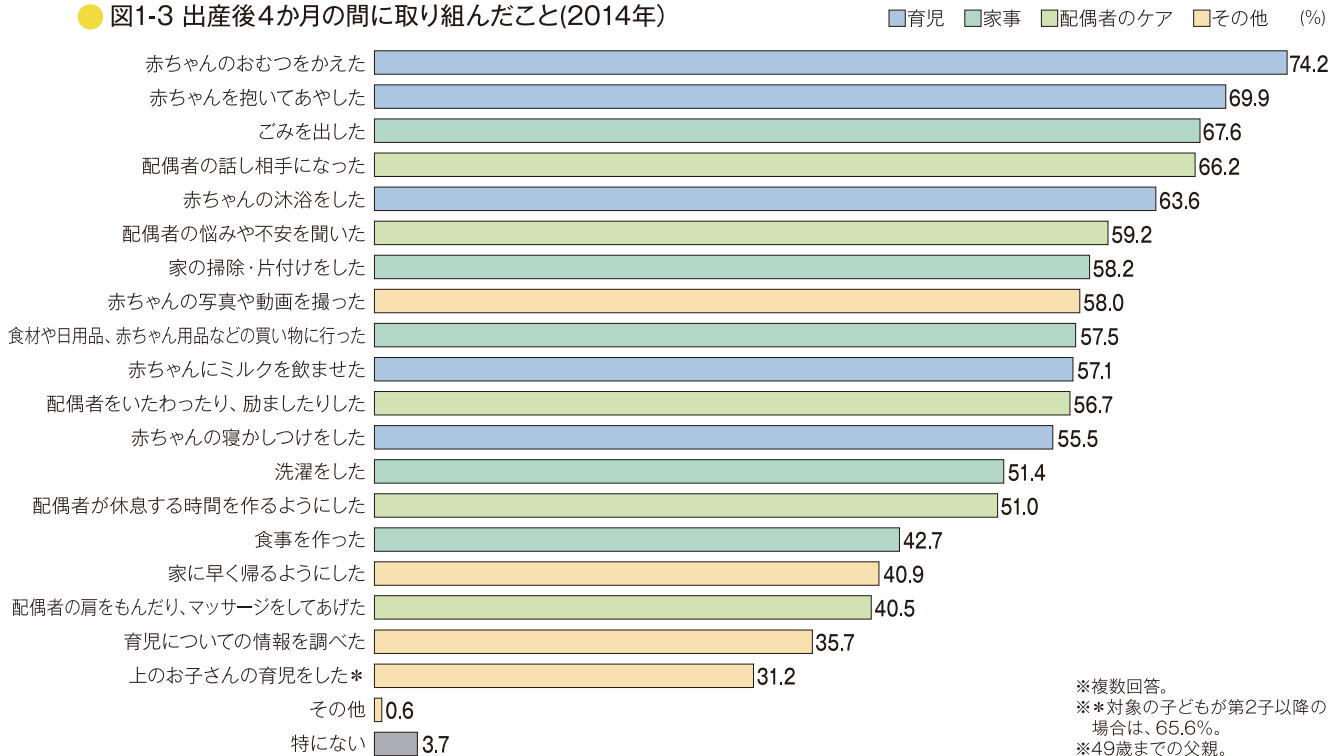
図示していないが、2014年調査では「子どもの出産時には休みを取りやすい」という質問であてはまると答えた父親のほうが、出産に立ち会った比率が高かった(あてはまる67.4%、あてはまらない57.2%)。出産への立ち会いは、父親や家族の意識、価値観、職場環境の変化が関連して高まっていると考えられる。

出産後4か月に父親が取り組んだこと

妻の出産後4か月くらいの間、父親は「育児」「家事」「配偶者のケア」など、さまざまなことに取り組んでいる。内容別にみると、短時間でも取り組みやすいものが上位にあがっている。

Q 対象のお子さんの誕生後4か月くらいまでの間、次のようなことをしましたか（していますか）。

● 図-1-3 出産後4か月の間に取り組んだこと(2014年)



● 表-1-1 出産後4か月の間に取り組んだこと (2014年・項目別)

※複数回答。
 ※49歳までの父親。 (%)

育児	割合 (%)	家事	割合 (%)
赤ちゃんのおむつをかえた	74.2	ごみを出した	67.6
赤ちゃんを抱いてあやした	69.9	家の掃除・片付けをした	58.2
赤ちゃんの沐浴をした	63.6	食材や日用品、赤ちゃん用品などの買い物に行った	57.5
赤ちゃんにミルクを飲ませた	57.1	洗濯をした	51.4
赤ちゃんの寝かしつけをした	55.5	食事を作った	42.7
配偶者のケア	割合 (%)	その他	割合 (%)
配偶者の話し相手になった	66.2	赤ちゃんの写真や動画を撮った	58.0
配偶者の悩みや不安を聞いた	59.2	家に早く帰るようにした	40.9
配偶者をいたわったり、励ましたりした	56.7	育児についての情報を調べた	35.7
配偶者が休息する時間を作るようにした	51.0	上のお子さんの育児をした	31.2
配偶者の肩をもんだり、マッサージをしてあげた	40.5	その他	0.6

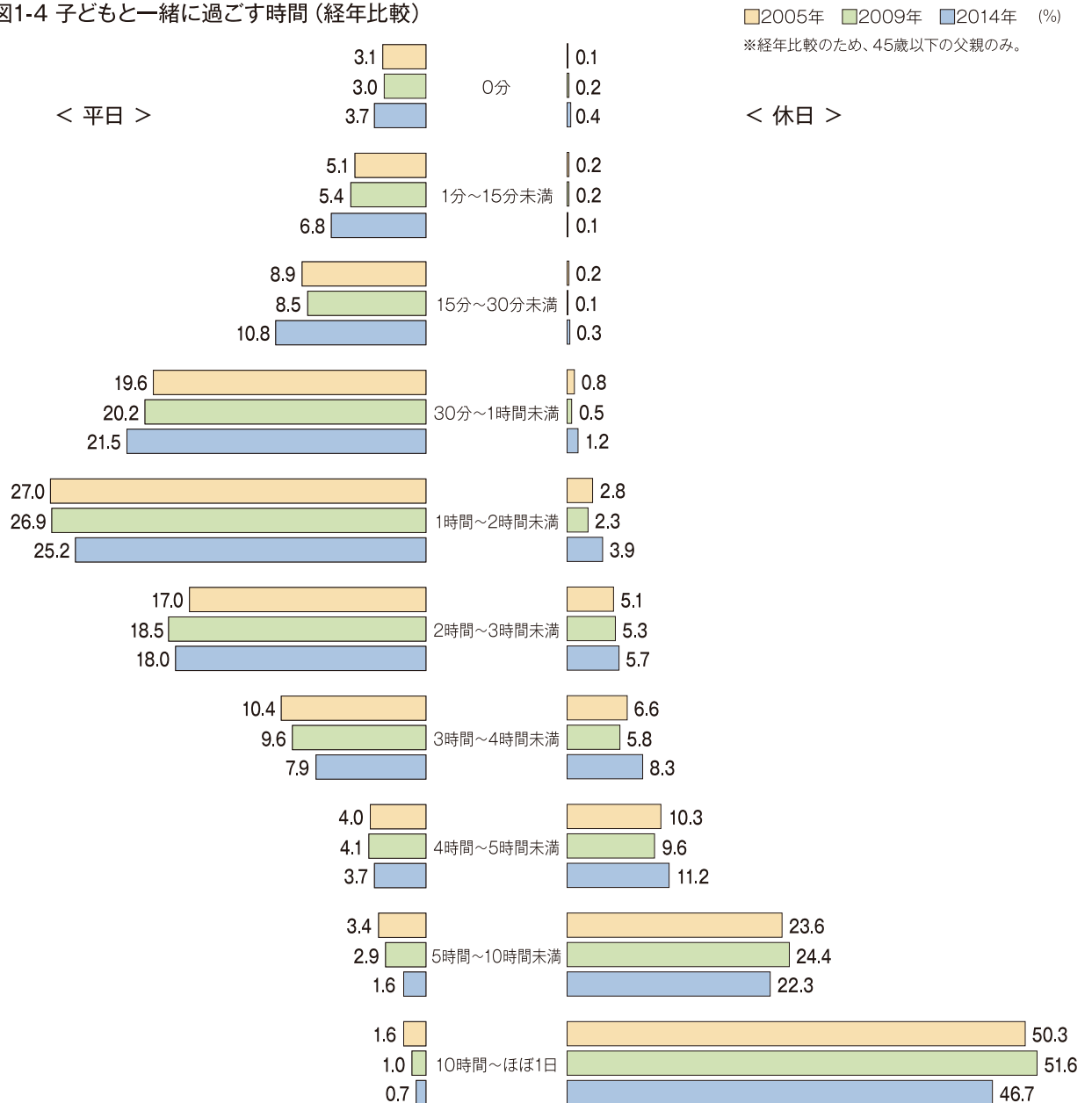
父親は出産後4か月くらいまでの間、家庭でどのようなことに取り組んだだろうか。比率の高い順に並べると、「赤ちゃんのおむつをかえた（育児）」74.2%、「赤ちゃんを抱いてあやした（育児）」69.9%、「ごみを出した（家事）」67.6%、「配偶者の話し相手になった（配偶者のケア）」66.2%とさまざまなことに取り組んでいた。内容別にみると、短い時間でも取り組みやすい項目が上位にあがった。

子どもと一緒に過ごす時間

平日は「1時間～2時間未満」、休日は「10時間～ほぼ1日」の比率がもっとも高い。平日に少ない分、休日に集中して過ごしている。

Q あなたは、(今回対象の) お子さんとのどのくらい一緒に過ごしていらっしゃいますか。平日と休日についておよその平均時間をお答えください。

● 図1-4 子どもと一緒に過ごす時間(経年比較)



平日と休日に子どもと一緒に過ごす時間を聞いたところ、2014年調査でもっとも高い比率だったのは、平日は「1時間～2時間未満」25.2%、休日は「10時間～ほぼ1日」46.7%だった。乳幼児を持つ父親は、平日に子どもと過ごす時間が少ない分、休日に集中して過ごすようにしている。この傾向は、9年間で変わらなかった。

図示していないが、平日の理想について、もっとも高い比率だったのは「2時間～3時間未満」31.3%だった。実際より、あと1時間長く過ごしたいというのが希望のようだ。

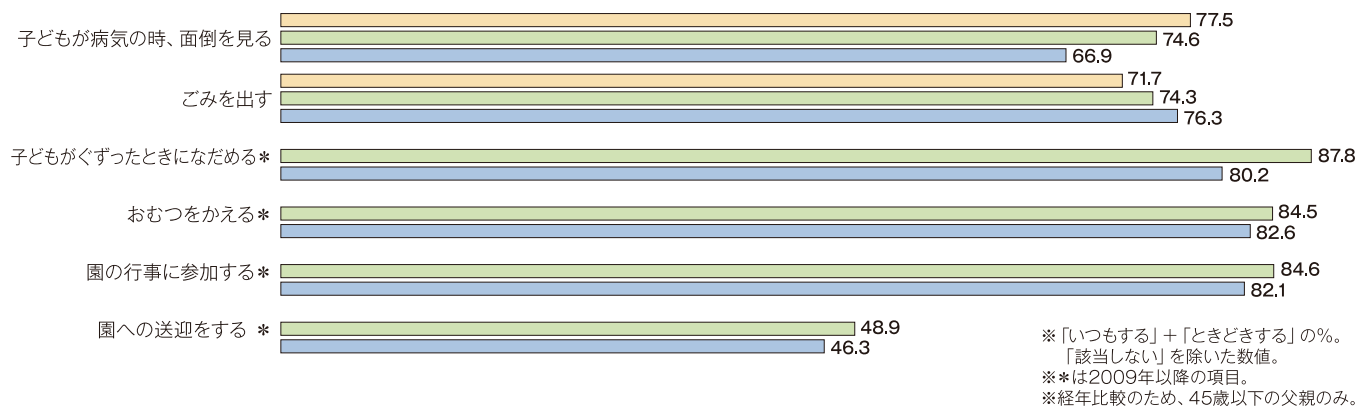
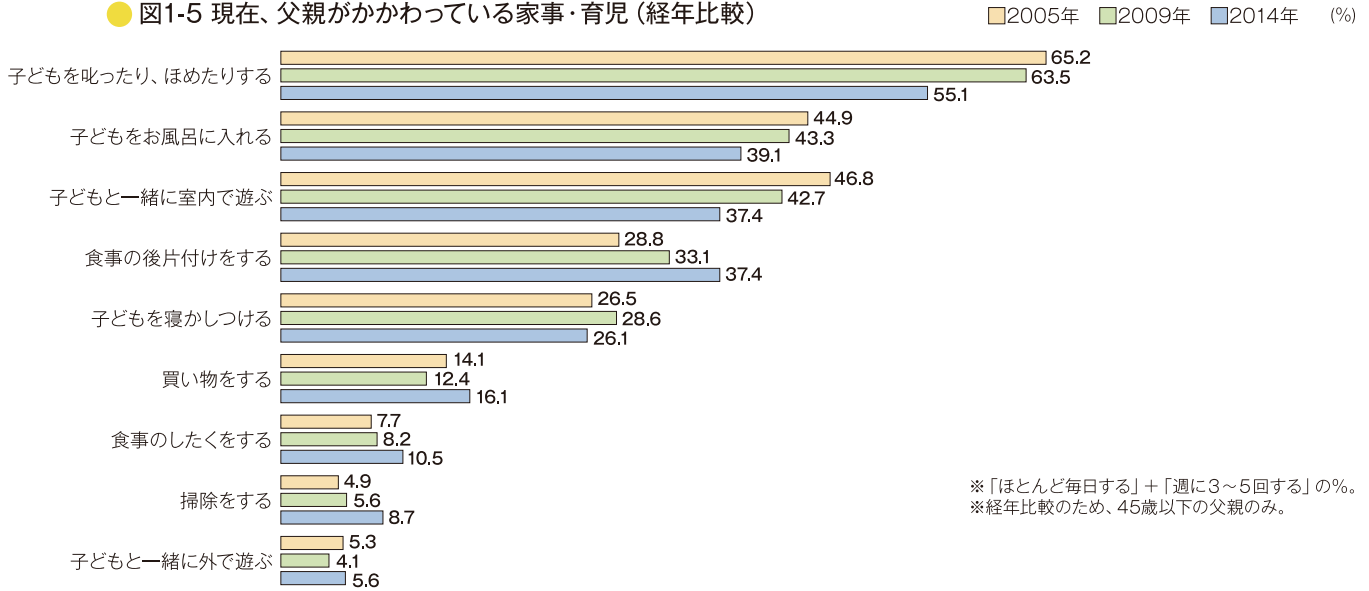
家事・育児のかかわりと理想

実際の育児へのかかわりは減る傾向がみられる。

一方、家事へのかかわりや子育てへの意欲は、増える傾向。

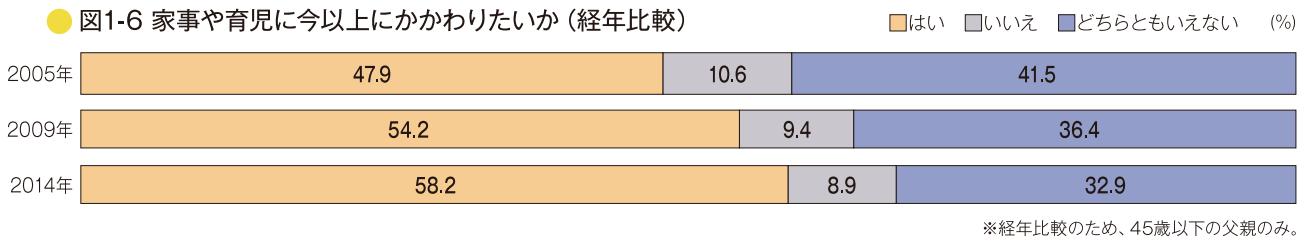
Q あなたは、次のようなことについて、どれくらいしていますか。

● 図1-5 現在、父親がかかっている家事・育児（経年比較）



Q あなたは、家事や育児に、今以上にかかわりたいと思いますか。

● 図1-6 家事や育児に今以上にかかわりたいか（経年比較）



実際の家事・育児の頻度を聞いたところ、育児の項目がいずれも減った。「子どもを叱ったり、ほめたりする」は2005年調査に比べて10.1ポイント、「子どもと一緒に室内で遊ぶ」は9.4ポイント減った。一方、家事の頻度は増える傾向がみられ、「食事の後片付けをする」は8.6ポイント、「ごみを出す」は4.6ポイント増えた。家事や育児に今以上にかかわりたいかという意欲については、「はい」が2005年調査と比べて10.3ポイント増えていた。

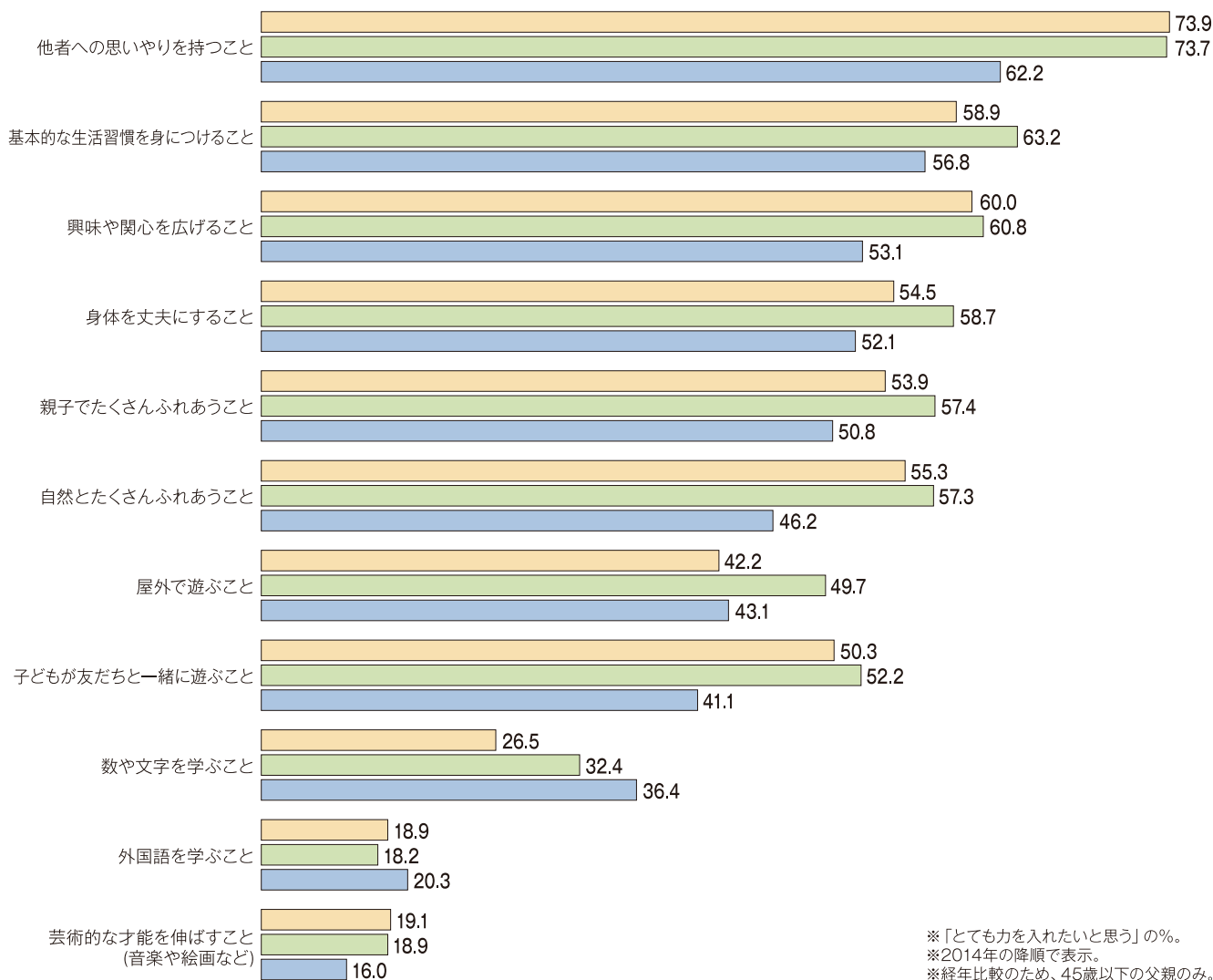
子育てで力を入れたいこと

「他者への思いやりを持つこと」や「興味や関心を広げること」は比率が高いものの、経年で減少。一方、「数や文字を学ぶこと」は増加。

Q あなたは、どのようなことに力を入れて、お子さんを育てたいと思いますか。

● 図2-1 力を入れて育てたいこと（経年比較）

■2005年 ■2009年 ■2014年 (%)



どのようなことに力を入れて子どもを育てたいかを聞いたところ、「他者への思いやりを持つこと」と回答した比率がもっとも高く、ついで「基本的な生活習慣を身につけること」「興味や関心を広げること」だった。これらの項目は3回の調査を通して高く、乳幼児を持つ父親が大切にしていることと言えるだろう。

経年での変化をみると、2005年調査に比べて「数や文字を学ぶこと」が9.9ポイント増える一方、「他者への思いやりを持つこと」が11.7ポイント、「自然とたくさんふれあうこと」が9.1ポイント、「子どもが友だちと一緒に遊ぶこと」が9.2ポイント減り、他者や自然と直接かかわる項目が減少する傾向がみられた。

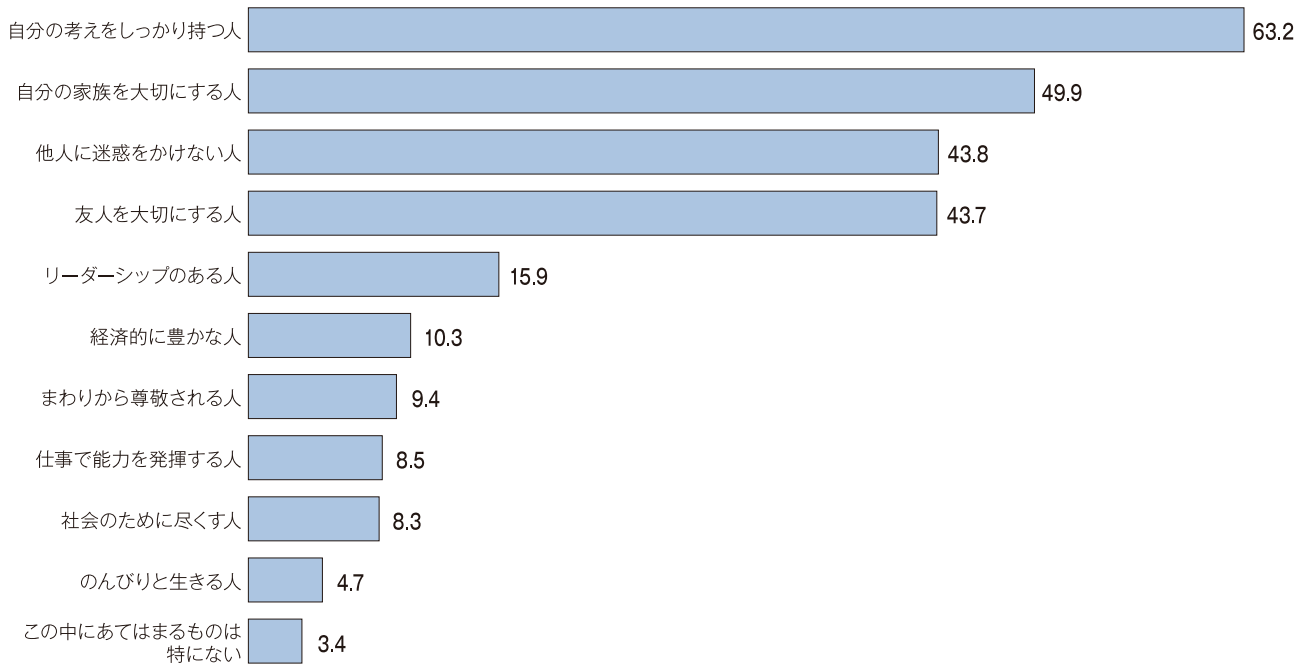
子どもの将来像について

「自分の考えをしっかり持つ人」の比率がもっとも高く、6割以上。
進学期待は、「大学卒業まで」が、やや増加。

Q お子さんに、将来どのような人になってほしいと思いますか。

● 図2-2 子どもに将来どのような人になってほしいか(2014年)

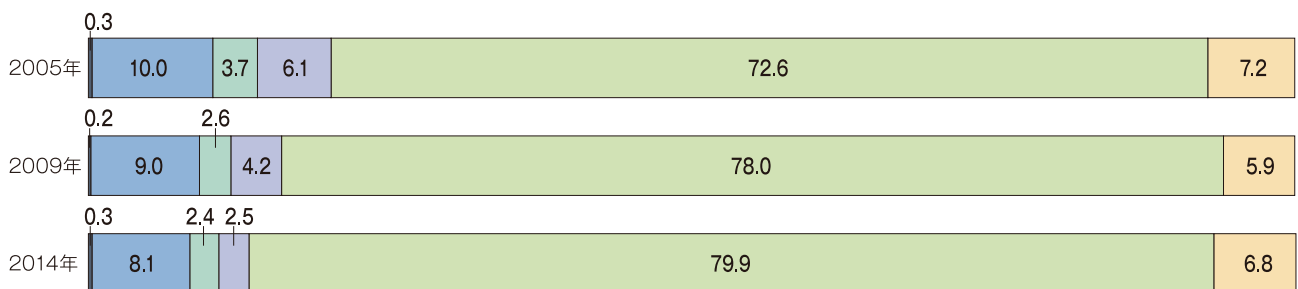
※複数回答(3つまで)。(%)
※49歳までの父親。



Q 現在、お子さんをどの程度まで進学させたいとお考えですか。

● 図2-3 進学期待(経年比較)

■中学校卒業まで ■高校卒業まで ■専門学校卒業まで (%)
■短大卒業まで ■大学卒業まで ■大学院卒業まで



※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

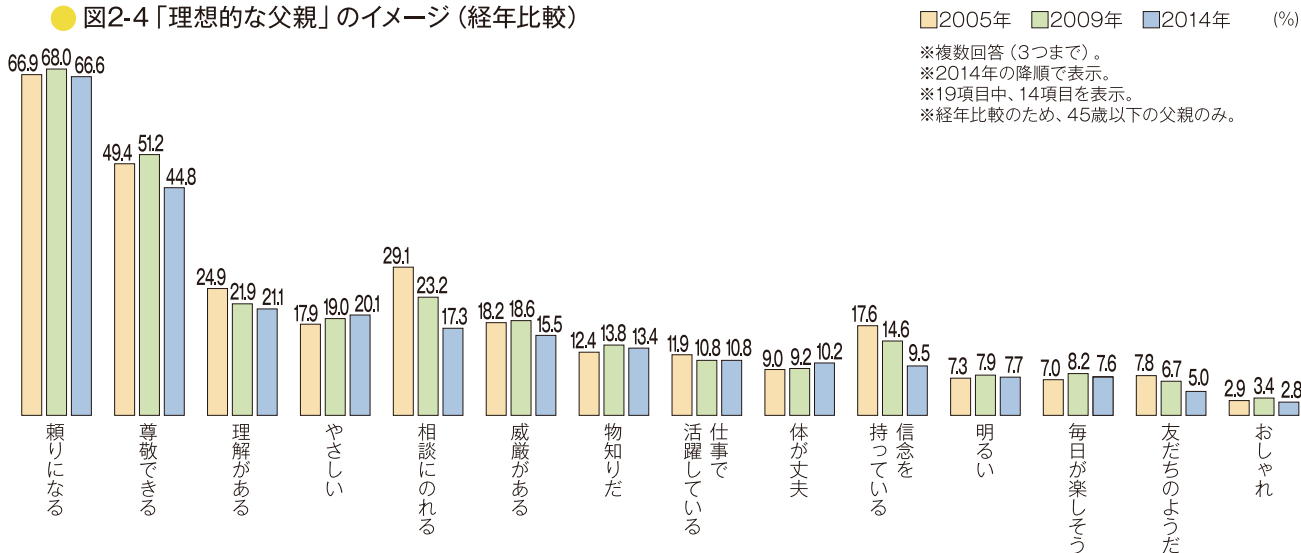
父親は、子どもに将来どのような人になってほしいと考えているだろうか。もっとも高い比率だったのは「自分の考えをしっかり持つ人」63.2%だった。ついで、家族や友人とのかかわりを大切にすること望んでいた。2009年調査と選ぶ項目数が異なることから経年での数値の比較はしないが、傾向は変わっていなかった。また、子どもにどの段階までの学歴を期待するかについては、「大学卒業まで」が2005年調査と比べて7.3ポイント増えていた。

理想的な父親のイメージ

「尊敬できる」「相談にのれる」「信念を持っている」が減少の傾向。家庭内での立場は「父親は子どもに対してあまり叱らず、家庭を楽しく保つことが望ましい」が増加。

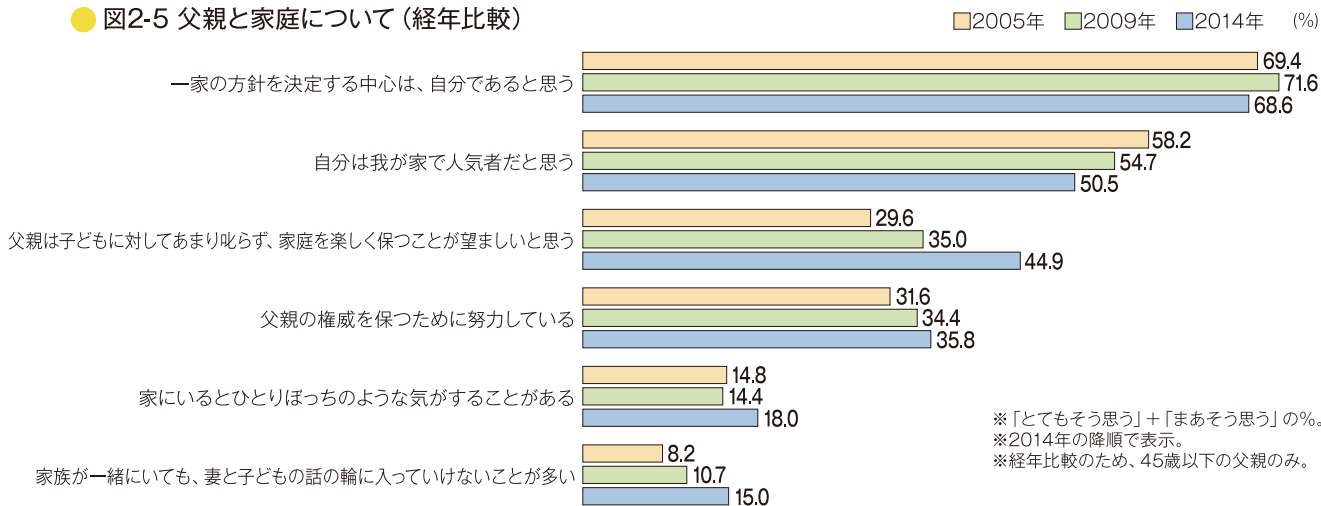
Q あなたの考える「理想的な父親」のイメージを以下の中から選んでください。

● 図2-4 「理想的な父親」のイメージ（経年比較）



Q あなたとご家族のことについておうかがいします。

● 図2-5 父親と家庭について（経年比較）



どのような理想の父親像をいだいて子育てをしているのだろうか。2014年調査でもっとも高い比率だったのは「頼りになる」66.6%、ついで「尊敬できる」44.8%、3番目に「理解がある」、4番目に「やさしい」だった。「頼りになる」「尊敬できる」は、2005年調査から一貫して高いが、「相談にのれる」は2005年調査に比べて11.8ポイント、また「信念を持っている」は8.1ポイント減った。

父親の家庭内での立場については、「父親は子どもに対してあまり叱らず、家庭を楽しく保つことが望ましいと思う」が2005年調査と比べて15.3ポイント増え、「自分は我が家で人気者だと思う」が7.7ポイント減り、「家族と一緒にいても、妻と子どもの話の輪に入っていけないことが多い」が6.8ポイント増えた。

父親として“子どもから頼りにされ尊敬できる存在”“子どもに対しては理解があり、やさしくありたい”、家庭内では“子どもをあまり叱らず、家庭を楽しく保ちたい”という願いを持つように変化しているようだ。

父親としての将来の不安

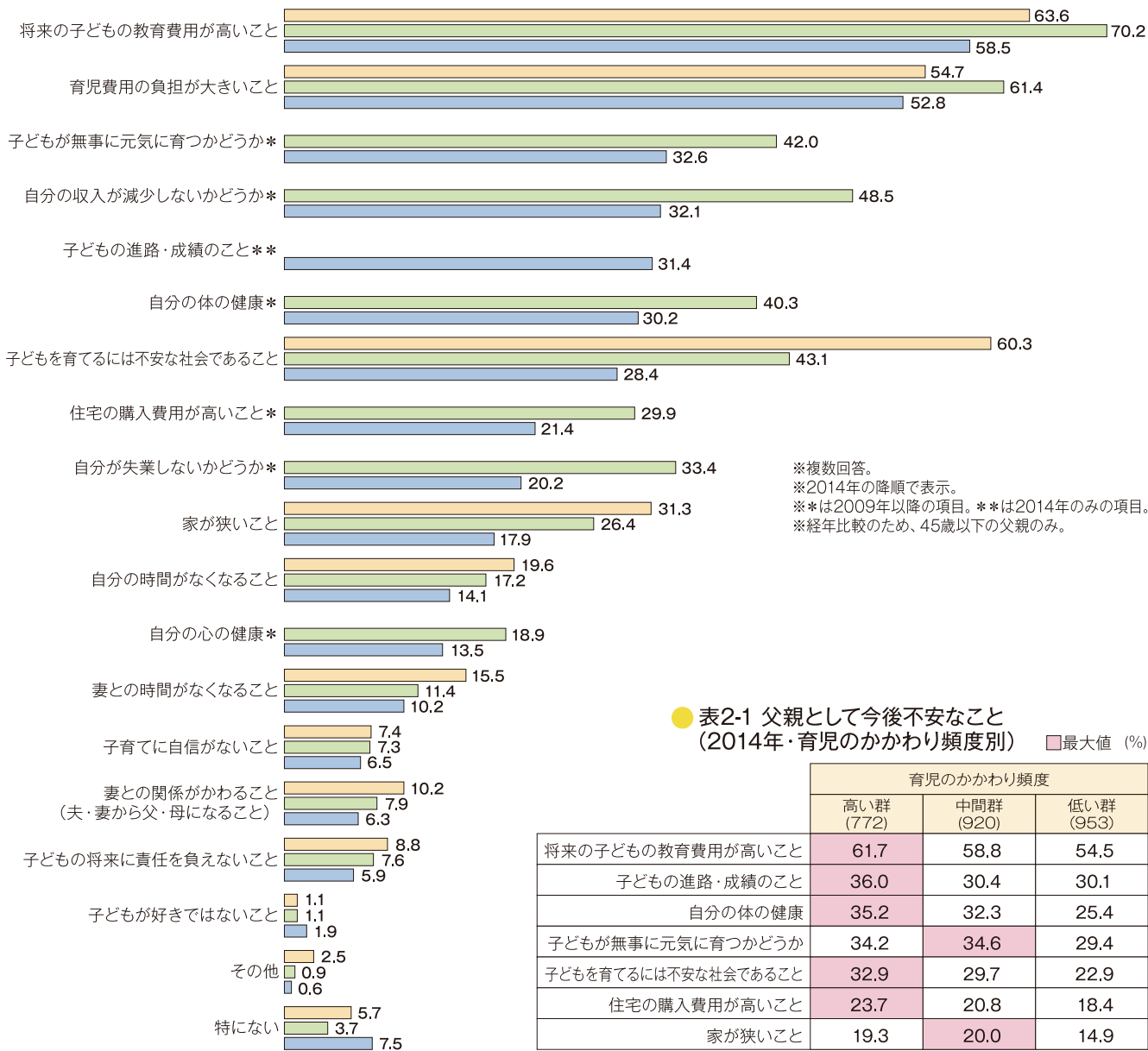
育児・教育費用負担や、子どもの進路・成績への不安が高い。

育児にかかわる頻度が高い父親は、将来にわたる子育ての見通しに不安。

Q あなたは、子育てや自分の生活に関して、今後不安なことはありますか。

● 図2-6 父親として今後不安なこと（経年比較）

2005年 2009年 2014年 (%)



※複数回答。
 ※2014年の降順で表示。
 ※*は2009年以降の項目。**は2014年のみの項目。
 ※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

● 表2-1 父親として今後不安なこと (2014年・育児のかかわり頻度別)

	育児のかかわり頻度		
	高い群 (772)	中間群 (920)	低い群 (953)
将来の子どもの教育費用が高いこと	61.7	58.8	54.5
子どもの進路・成績のこと	36.0	30.4	30.1
自分の体の健康	35.2	32.3	25.4
子どもが無事に元気に育つかどうか	34.2	34.6	29.4
子どもを育てるには不安な社会であること	32.9	29.7	22.9
住宅の購入費用が高いこと	23.7	20.8	18.4
家が狭いこと	19.3	20.0	14.9

※()内はサンプル数。
 ※49歳までの父親。
 ※育児のかかわり頻度は、図1-5より育児5項目を頻度から得点化し、高い群、中間群、低い群に3分類した。

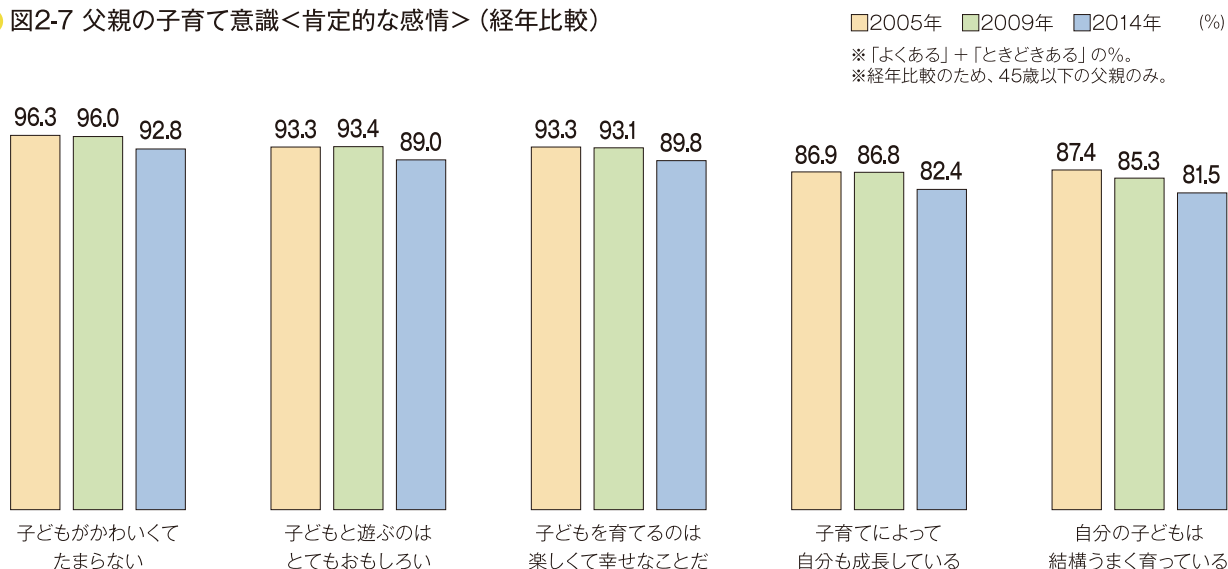
父親として今後不安なことを聞くと、2014年調査でも上位に「将来の子どもの教育費用が高いこと」「育児費用の負担が大きいこと」と子育てでの費用面での負担があがった。また、父親の育児にかかわる頻度が高いほうが、将来の子どもの教育費用負担、子どもの進路・成績、自分の体の健康など、将来にわたる子育ての見通しへの不安が大きい傾向がみられた。子どもと実際にかかわることで、子どもをどう育てるかについて長い目で具体的に考えることがうかがえる。

子育て意識

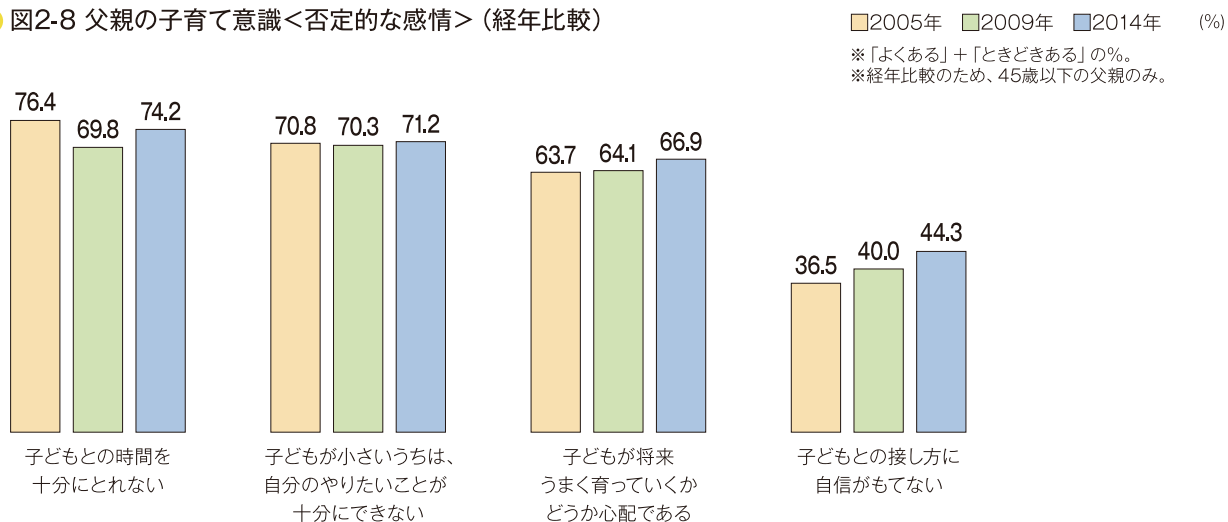
父親の子育て意識は、全体として大きく変わらないものの、「自分の子どもは結構うまく育っている」が減り、「子どもとの接し方に自信がもてない」が増える傾向。

Q あなたは、最近次のようなことをお感じになることがありますか。

● 図2-7 父親の子育て意識<肯定的な感情> (経年比較)



● 図2-8 父親の子育て意識<否定的な感情> (経年比較)



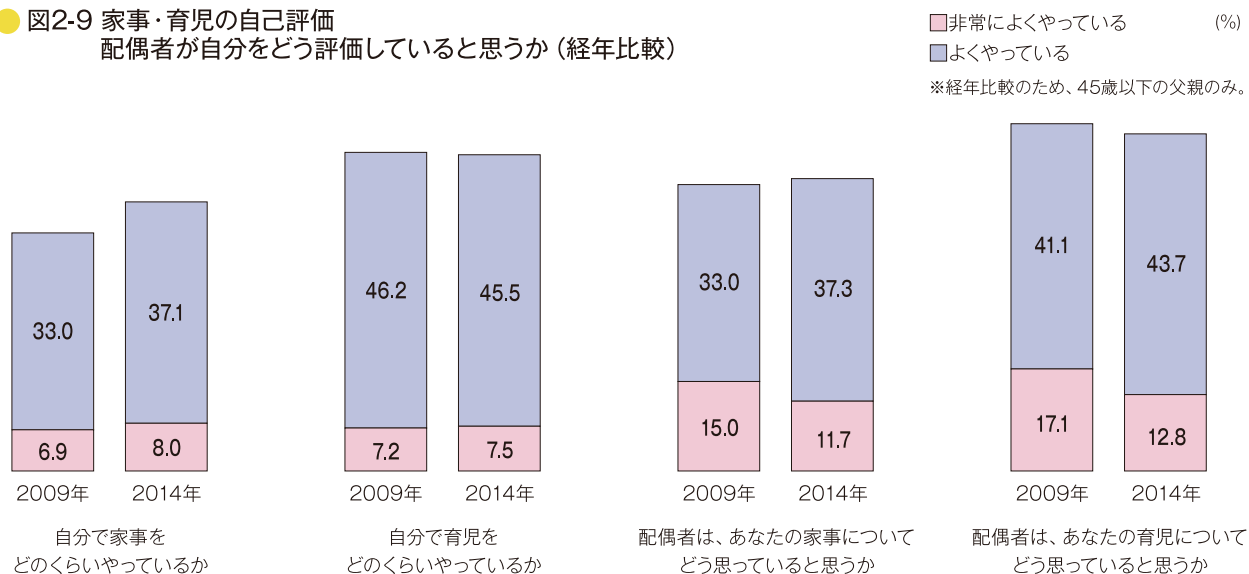
父親の子育て意識はどのように変化しているだろうか。肯定的な感情と否定的な感情について聞いた。肯定的な感情は、5つの項目すべてでわずかに減る傾向がみられた。一方、否定的な感情はわずかに増える傾向がみられ、「子どもとの接し方に自信がもてない」では、2005年調査と比べて7.8ポイント増える結果となった。

家事・育児の自己評価、満足度

父親は、5年前に比べて、家事への自己評価が高くなっている。
現在の生活への満足度は、あまり変わらない。

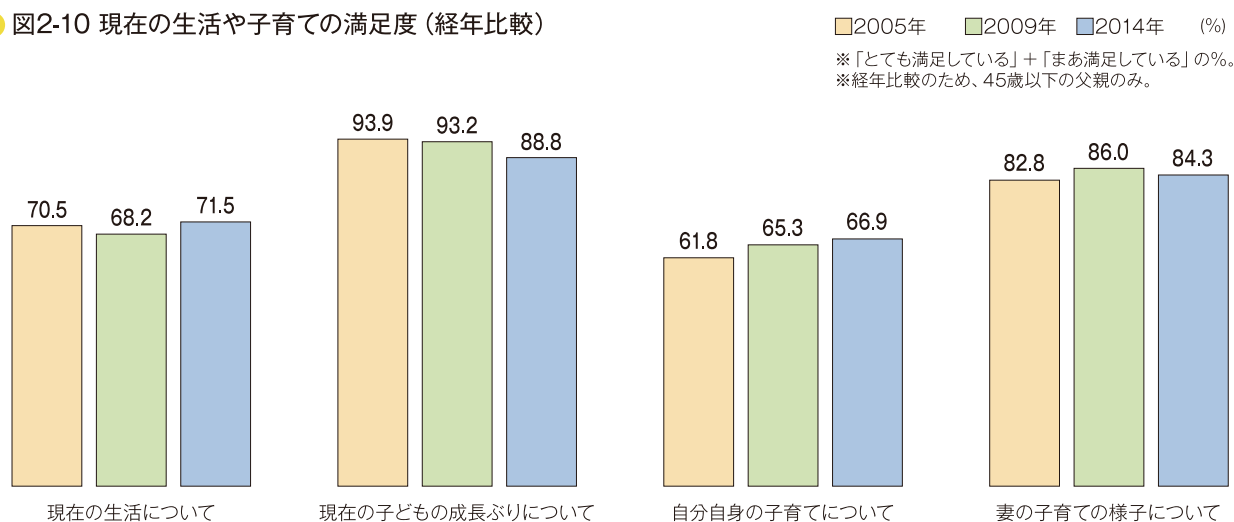
Q あなたやあなたの配偶者に関して、該当するものをお選びください。

● 図2-9 家事・育児の自己評価
配偶者が自分をどう評価していると思うか（経年比較）



Q あなたの現在の生活や子育ての満足度についておうかがいします。

● 図2-10 現在の生活や子育ての満足度（経年比較）



父親の家事・育児に対する自己評価と、配偶者がどう自分を評価していると思うかについて聞いた。家事への自己評価は、2009年調査と比べて5.2ポイント増えた。7ページの調査結果でも家事・育児へのかかわりで家事が増えていることを考えると、家事への意識が高まっているのだろう。一方、育児へのかかわりは減っていたが、自己評価は変わらなかった。配偶者からの評価に対しても変化はみられなかった。

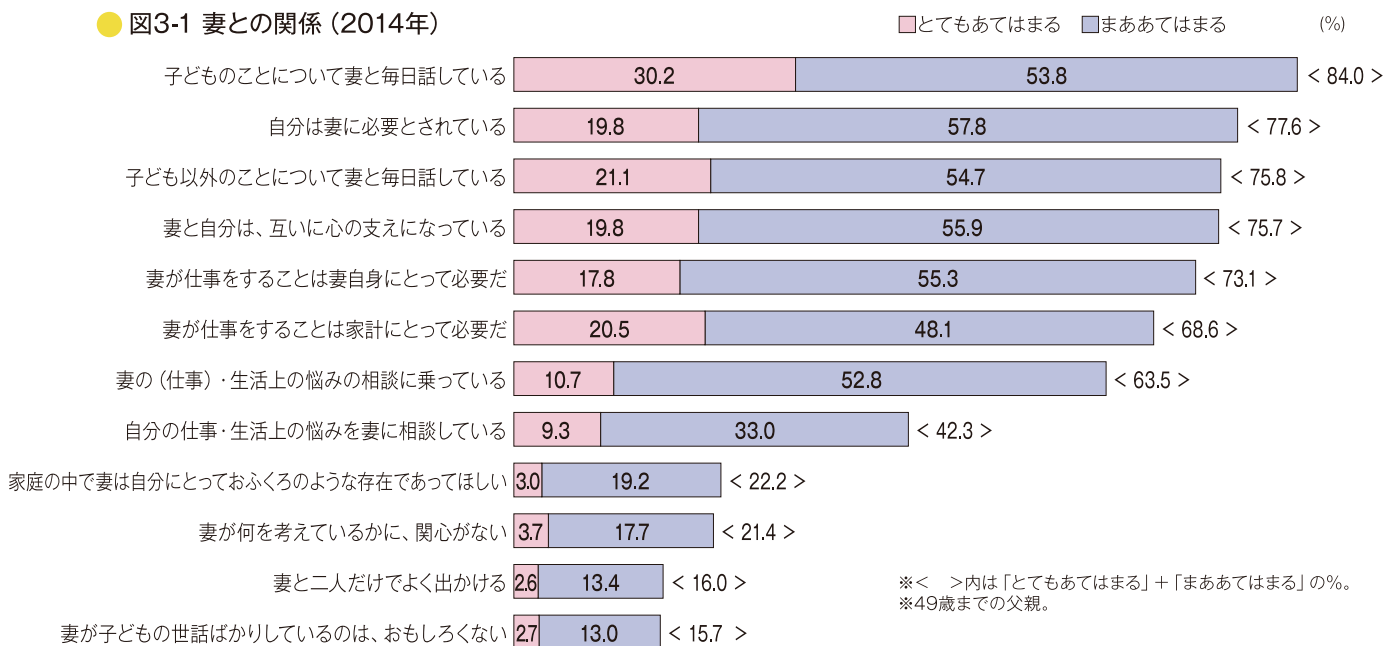
現在の生活や子育てへの満足度の変化はどうか。現在の生活の満足度は7割前後でほぼ変わらなかった。現在の子どもの成長ぶりへの満足度はやや減り、自分自身の子育てへの満足度はやや増えた。

妻とのかかわり

8割以上の父親が、妻と、子どものことについて毎日話している。
30代以上で「妻に必要とされている」が減少し、20~30代で「おふくろのような存在」「何を考えているかに、関心がない」が増加している。

Q 配偶者との関係についておうかがいします。

● 図3-1 妻との関係 (2014年)



● 表3-1 妻との関係 (経年比較・年代別)

■最大値と最小値の差が10ポイント以上 ■最大値と最小値の差が5ポイント以上 (%)

	20代			30代			40代		
	2005年 (318)	2009年 (322)	2014年 (145)	2005年 (1987)	2009年 (3144)	2014年 (1332)	2005年 (651)	2009年 (1098)	2014年 (822)
子どものことについて妻と毎日話している		89.2	89.0		87.7	85.5		83.8	83.3
子ども以外のことについて妻と毎日話している		87.9	89.0		76.4	77.3		73.2	74.3
妻の(仕事)・生活上の悩みの相談に乗っている		69.9	68.3		65.8	66.8		63.6	59.4
自分の仕事・生活上の悩みを妻に相談している			51.5		41.7	44.7		36.5	38.2
自分は妻に必要とされている	89.6	82.8	84.1	92.3	81.1	78.1	88.5	82.2	76.7
妻と自分は、互いに心の支えになっている	82.1	86.7	78.6	82.4	79.1	76.8	78.0	80.5	75.2
家庭の中で妻は自分にとっておふくろのような存在であってほしい	13.9	27.1	28.2	13.9	17.6	23.4	17.2	15.8	20.2
妻が何を考えているかに、関心がない	14.5	20.8	24.8	11.6	15.9	21.8	14.6	14.0	20.2
妻と二人だけでよく出かける	19.1	21.1	20.7	14.3	11.4	17.0	13.9	10.9	14.6
妻が子どもの世話ばかりしているのは、おもしろくない	16.6	18.4	23.4	10.9	11.6	18.2	10.9	8.9	11.8

※()内はサンプル数。
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

父親は、配偶者との関係についてどのような意識を持っているだろうか。比率の高い順に、「子どものことについて妻と毎日話している」84.0%、「自分は妻に必要とされている」77.6%、「子ども以外のことについて妻と毎日話している」75.8%、「妻と自分は、互いに心の支えになっている」75.7%と、毎日の会話によるコミュニケーション、ついで心の支えがあがった。さらに、家計に関すること、相談相手と続いた。

年代別に経年でみると、20代から30代で「家庭の中で妻は自分にとっておふくろのような存在であってほしい」「妻が何を考えているかに、関心がない」の比率が大きく増え、30代以上で「自分は妻に必要とされている」の比率が減少した。

周囲の人との関係

子どもに対して「一緒にいて楽しい」「自分を必要としている」「できるだけのことをしてあげたい」が減少。妻に対して「安心して一緒にいることができる」が減少する一方、「できるだけのことをしてあげたい」が増加。

Q 周囲の人との関係についておうかがいします。

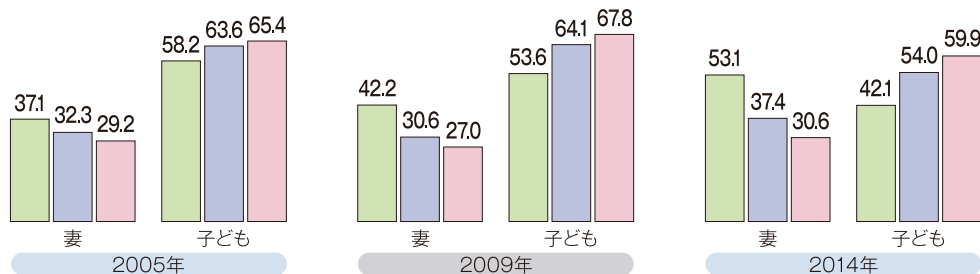
● 表3-2 周囲の人との関係（経年比較）

		2005年	2009年	2014年
一緒にいて楽しい人	妻	22.7	22.9	26.5
	子ども	56.3	57.5	51.3
	仕事の仲間	2.8	2.5	3.4
	友人	14.9	13.2	13.8
	誰もいない	1.7	2.3	3.6
安心して一緒にいることができる人	妻	78.1	73.9	71.6
	子ども	11.4	14.2	14.5
	仕事の仲間	1.1	0.8	1.8
	友人	3.2	4.2	4.3
	誰もいない	2.5	3.4	4.7
自分の考えや意見を率直に交わし合える人	妻	57.7	57.0	56.8
	子ども	1.7	1.7	3.6
	仕事の仲間	10.2	9.5	9.0
	友人	20.6	19.5	17.9
	誰もいない	5.4	7.3	8.2
つらいとき、こまったとき、相談する人	妻	54.2	55.5	56.1
	子ども	0.8	0.9	2.5
	仕事の仲間	5.4	6.4	6.1
	友人	16.9	14.3	13.4
	誰もいない	12.1	12.8	13.7
自分を必要としている人	妻	52.4	54.7	53.8
	子ども	42.3	38.5	35.7
	仕事の仲間	0.9	0.6	1.6
	友人	0.5	0.7	1.6
	誰もいない	2.2	3.7	5.7
その人のためならできるだけのことをしてあげたいと思う人	妻	32.1	30.6	35.7
	子ども	63.4	64.2	55.5
	仕事の仲間	0.5	0.4	0.9
	友人	0.8	0.9	1.7
	誰もいない	1.1	1.6	3.8

■ 最大値と最小値の差が5ポイント以上。（%）

※各項目について、8項目の選択肢の中から1つ選択。「自分の父親」「自分の母親」「その他」を除く5項目について表示。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

● 図3-2 その人のためならできるだけのことをしてあげたいと思う人（経年比較・年代別） ■20代 ■30代 ■40代（%）



※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

周囲の人との関係について聞いたところ、子どもについては「一緒にいて楽しい人」「自分を必要としている人」「できるだけのことをしてあげたいと思う人」で選択される比率が減った。また、妻については「安心して一緒にいることができる人」が減り、「できるだけのことをしてあげたいと思う人」が増えた。「できるだけのことをしてあげたいと思う人」について詳しくみると、2005年調査、2009年調査ではどの年代でも妻より子どものほうが選択される比率が高かったが、2014年調査では20代で「妻」53.1%、「子ども」42.1%と妻の比率が高くなっていった。乳幼児のいる家庭で、若い父親が妻を支えたいと思う意識が高まっているようだ。

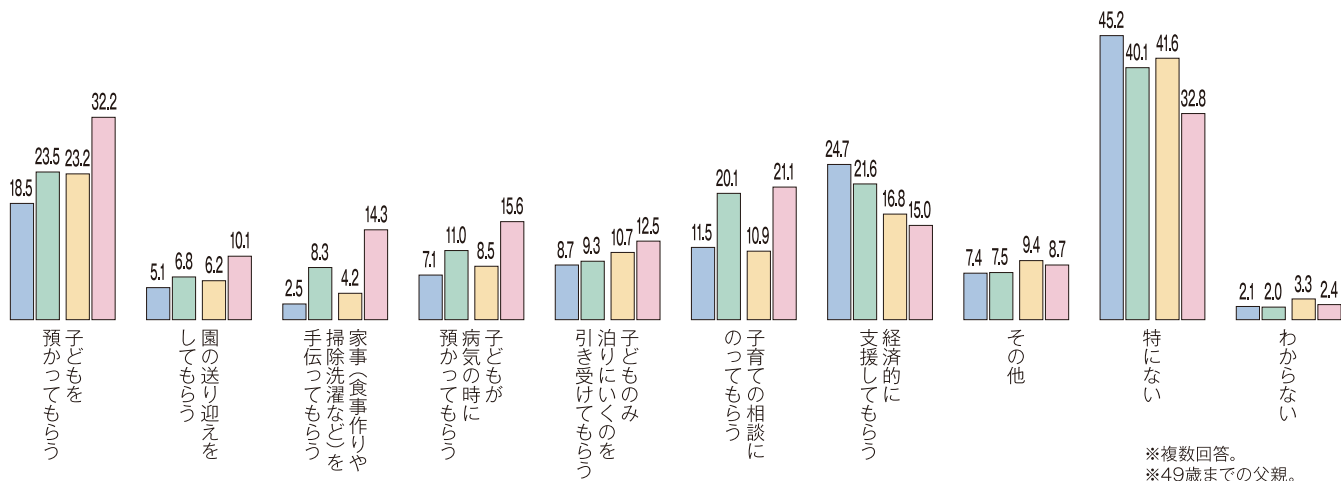
祖父母からの支援

妻の母親に、子どもの預かり、家事の手伝い、子育て相談などさまざまに支援してもらっている。また、祖父母を頼りにする比率はわずかに増加の傾向。

Q あなたと配偶者の親御さんには、子育てや家事に関して、どの程度手助けをしてもらっていますか。

● 図3-3 祖父母からの支援（2014年）

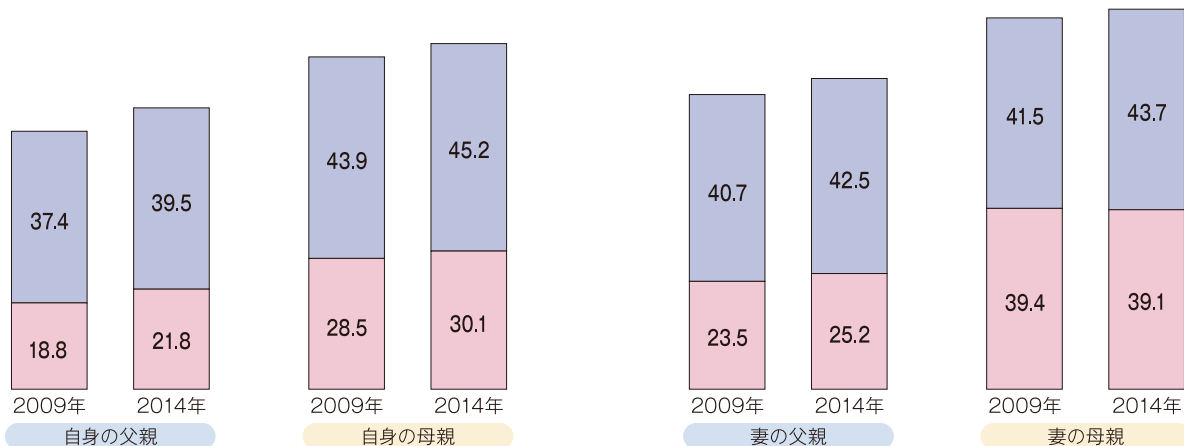
■自身の父親 ■自身の母親 ■妻の父親 ■妻の母親 (%)



Q あなたまたは配偶者の親御さんは、子育てをする上でどのくらい頼りになりますか。

● 図3-4 祖父母は頼りになるか（経年比較）

■とても頼りになる ■まあ頼りになる (%)



※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

祖父母からどのような支援を得ているかを複数回答で聞いた。全体的にもっとも比率が高かったのは「子どもを預かってもらう」32.2%（妻の母親の数値）だった。また、「子育ての相談にのってもらおう」（夫の母親20.1%、妻の母親21.1%）、「経済的に支援してもらおう」（夫の父親24.7%、夫の母親21.6%）も高い比率だった。図示していないが、子どもが保育園に通う場合、「園の送り迎え」19.9%、「子どもが病気の時に預かってもらう」23.8%（ともに妻の母親）と、祖父母に支援してもらおう比率が高かった。

2009年調査と2014年調査を比べると受ける支援の状況に変化はなかった（図示省略）が、図3-4のように頼りになるとする比率がわずかに高くなる傾向がみられた。

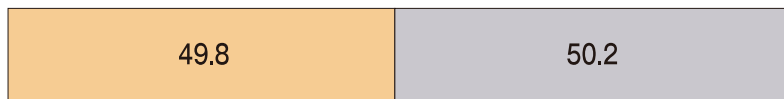
子育てについて話せる友人

子育てについて話せる友人がいる人は、約5割。

知り合ったきっかけは「仕事上での関わり」「学生時代に一緒」の比率が高い。

Q あなたには、子育てについて直接会って話をする事ができる友人は何人くらいいますか。(男女は問いません。)

● 図3-5 子育てについて話せる友人の有無(2014年) □いる □いない (%)



※49歳までの父親。

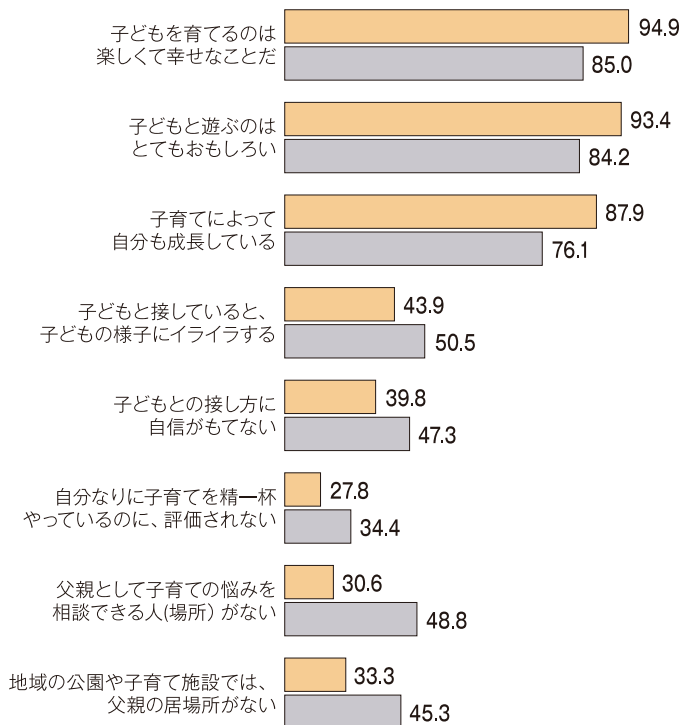
● 図3-6 子育てを話せる友人の平均人数(2014年)

4.3人

※図3-5で「いる」と回答した人のみ。
※49歳までの父親。

● 図3-7 子育てについて話せる友人の有無と子育て意識(2014年)

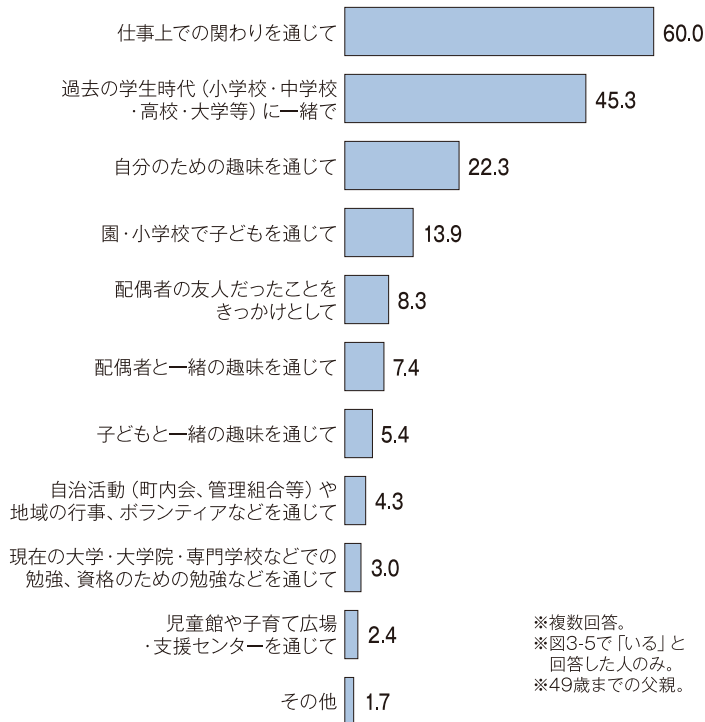
□友人がいる(1318) □友人がいない(1327) (%)



※()内はサンプル数。
※「よくある」+「ときどきある」の%。
※49歳までの父親。

Q 子育てについて直接会って話をする事ができる友人とは、どのようなきっかけで知り合いましたか。

● 図3-8 知り合うきっかけ(2014年) (%)



※複数回答。
※図3-5で「いる」と回答した人のみ。
※49歳までの父親。

子育てについて直接会って話をする事ができる友人はどれくらいいるだろうか。「いる」と回答した人は49.8%で、その平均人数は4.3人だった。知り合ったきっかけは、比率の高い順に「仕事上での関わりを通じて」60.0%、「過去の学生時代に一緒で」45.3%、「自分のための趣味を通じて」22.3%だった。また、友人のいる人のほうが、子育てに肯定的な感情をもつ比率が高く、否定的な感情が低い傾向がみられた。

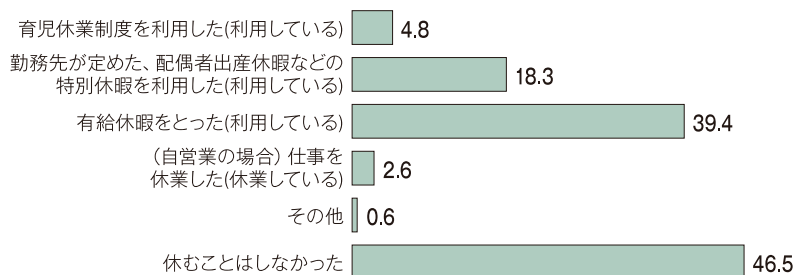
子どもと接するときの疑問の解決や工夫はささやかなことの積み重ねであることも多い。近い年齢の子どもを持つ親の試みは自分が子どもと接するときのヒントになる。また、子どもの将来について考えるとき、さまざまな年代や立場など、複数の視点が参考になるだろう。調査結果から、父親も子育てへのかかわりが求められる中、直接会って話をする事ができる友人の存在が必要に思われる。

出産前後の休暇について

父親の5割強が、何らかの形で出産・子育てのために仕事を休んでいる。
育児休業制度を利用しなかった理由は、「忙しくてとれそうもない」「職場に迷惑」の比率が高い。

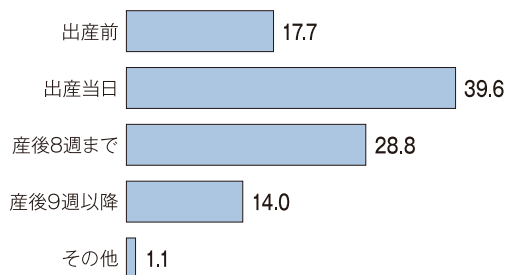
Q 今回対象となっているお子さんの出産前後から1歳2か月までの間、
出産や育児のために、次のようなかたちで仕事を休みましたか（休んでいますか）。

● 図4-1 どのようなかたちで休んだか（2014年） (%)



※複数回答。
※その期間に働いていなかった（働いていない）人は、「休むことはしなかった」を選択。
※49歳までの父親。

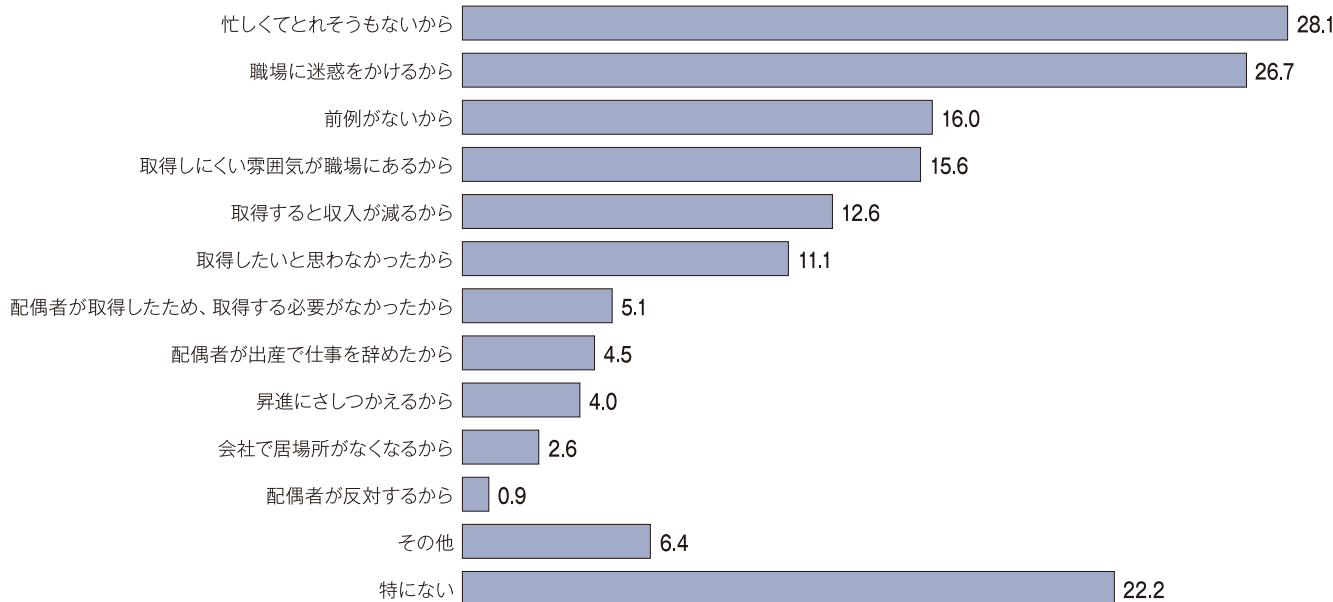
● 図4-2 いつ頃休みをとったか（2014年） (%)



※複数回答。
※図4-1で、「休むことはしなかった」と回答した人以外のみ。
※49歳までの父親。

Q 育児休業制度を利用しなかった理由を教えてください。

● 図4-3 育児休業制度を利用しなかった理由（2014年）



※複数回答（3つまで）。
※図4-1で、「育児休業制度を利用した」を選択しなかった人のみ。
※49歳までの父親。

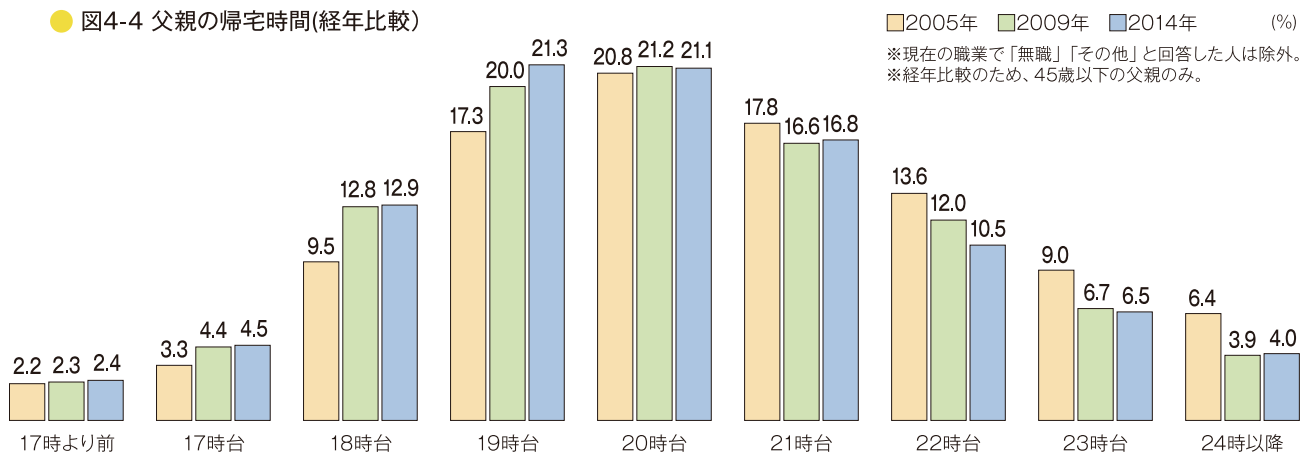
出産前後から1歳2か月までの間、父親は出産や育児のために休暇をどのようにしたのだろうか。今回の調査では、父親の53.5%が出産や育児のために仕事を休んでいる（全体から「休むことはしなかった」46.5%を引いた数値）。比率の高い順に「有給休暇をとった（利用している）」39.4%、「特別休暇を利用した（利用している）」18.3%だった。育児休業制度を利用した（利用している）比率は4.8%にとどまり、利用しなかった理由として、比率の高い順に「忙しくてとれそうもないから」28.1%、「職場に迷惑をかけるから」26.7%だった。

両立支援制度について

この5年間で、「短時間勤務制度」「子どもの看護休暇」は増加。
しかし、父親の帰宅時間に大きな変化はみられない。

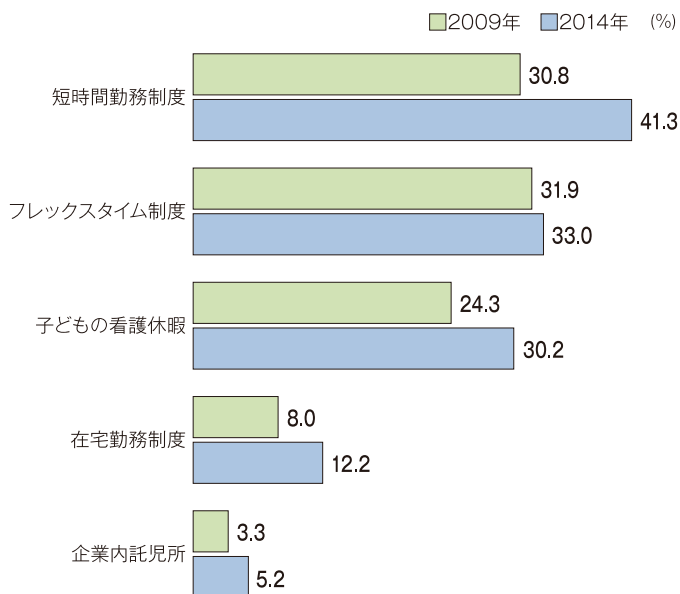
Q あなたは平均して何時ごろ仕事から帰宅することが多いですか。

● 図4-4 父親の帰宅時間(経年比較)



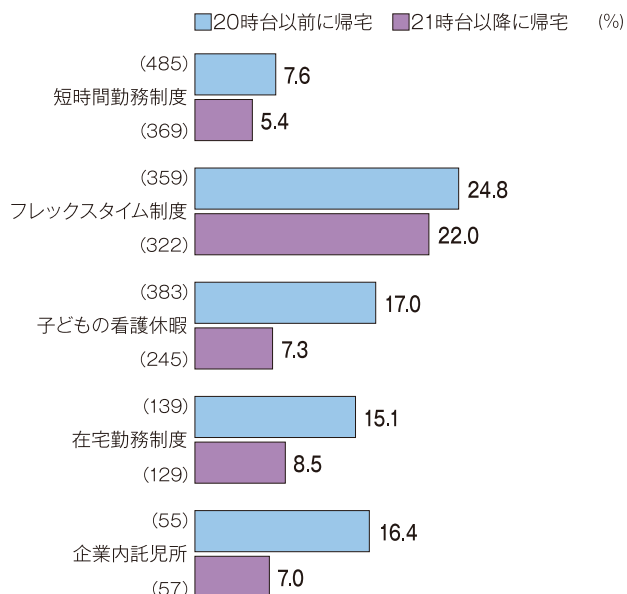
Q あなたの職場では、以下のような制度はありますか。その制度は利用しやすいですか。

● 図4-5 職場の両立支援制度の有無(経年比較)



※複数回答。
※「制度はある」の%。
※現在の職業で「内職・在宅ワーク」「無職」「その他」の回答者は集計母数から除外。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

● 図4-6 利用のしやすさ(2014年・帰宅時間別)



※()内はサンプル数。
※図4-5で「制度はある」と回答した人のみ。
※「とても利用しやすい」の%。
※大学卒業以上で算出。
※49歳までの父親。

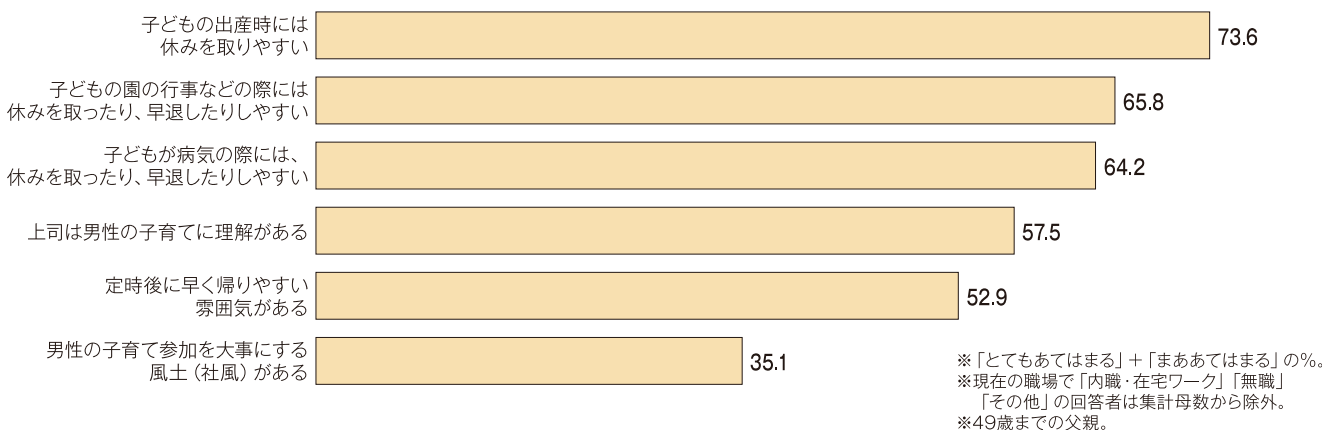
ワークライフバランスの実態をみる指標のひとつに帰宅時間がある。2009年調査と比べると大きな変化はみられなかった。では、職場の両立支援制度は変化しただろうか。たずねた5つの制度すべてで「ある」と答えた比率が2009年調査と比べて増えており、とくに「短時間勤務制度」は2009年調査と比べて10.5ポイント、「子どもの看護休暇」は5.9ポイント増えていた。両立支援制度は着実に増えているようだ。さらに、利用しやすさを帰宅時間別にみると、20時台以前に帰宅している父親のほうが利用しやすいと答える比率が高かった。

父親の職場環境

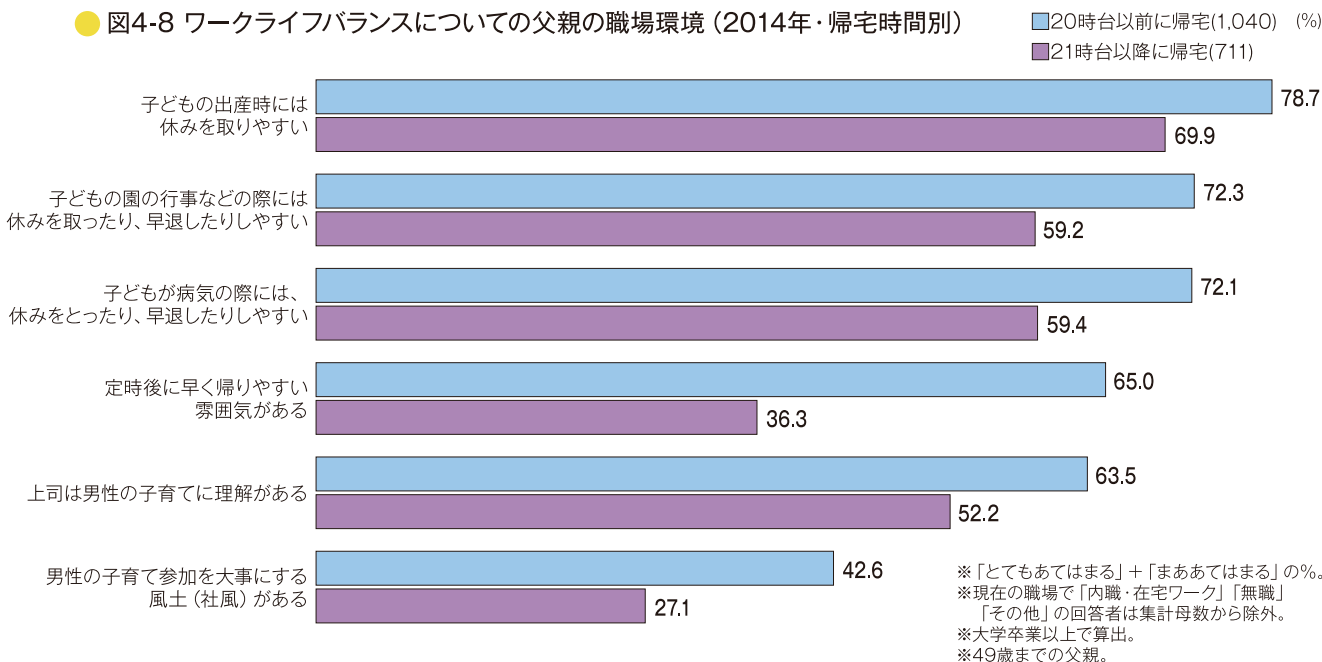
出産時の休みや、子どもの行事や病気の際の休み、早退のしやすさは6割を超える。しかし、日々の帰宅時間が遅い父親は、父親の子育てに対する職場の理解が少ない傾向。

Q あなたの職場では、男性（父親）の子育てに関する次のようなことについて、どれくらいあてはまりますか。

● 図4-7 ワークライフバランスについての父親の職場環境(2014年)



● 図4-8 ワークライフバランスについての父親の職場環境 (2014年・帰宅時間別)



ワークライフバランスの実現には、職場の制度に加え、子育てへの理解や風土など質的な要素もかかわる。父親に職場環境についてあてはまるか聞いたところ、もっとも高い比率だったのは「子どもの出産時には休みを取りやすい」73.6%だった。ついで、子どもの行事や病気の際の休暇や早退が6割を超えた。一方、「男性の子育て参加を大事にする風土(社風)がある」は35.1%にとどまった。また、図4-8から帰宅時間が早いほうが男性の子育てに理解があり、柔軟な働き方を支援する風土があることがわかる。

ある程度、予定の見込みがある出産や行事に加え、子どもの突発的な病気などに対して職場の理解が広がっている。一方、雰囲気や風土などといったことはなかなか広がりにくいようだ。

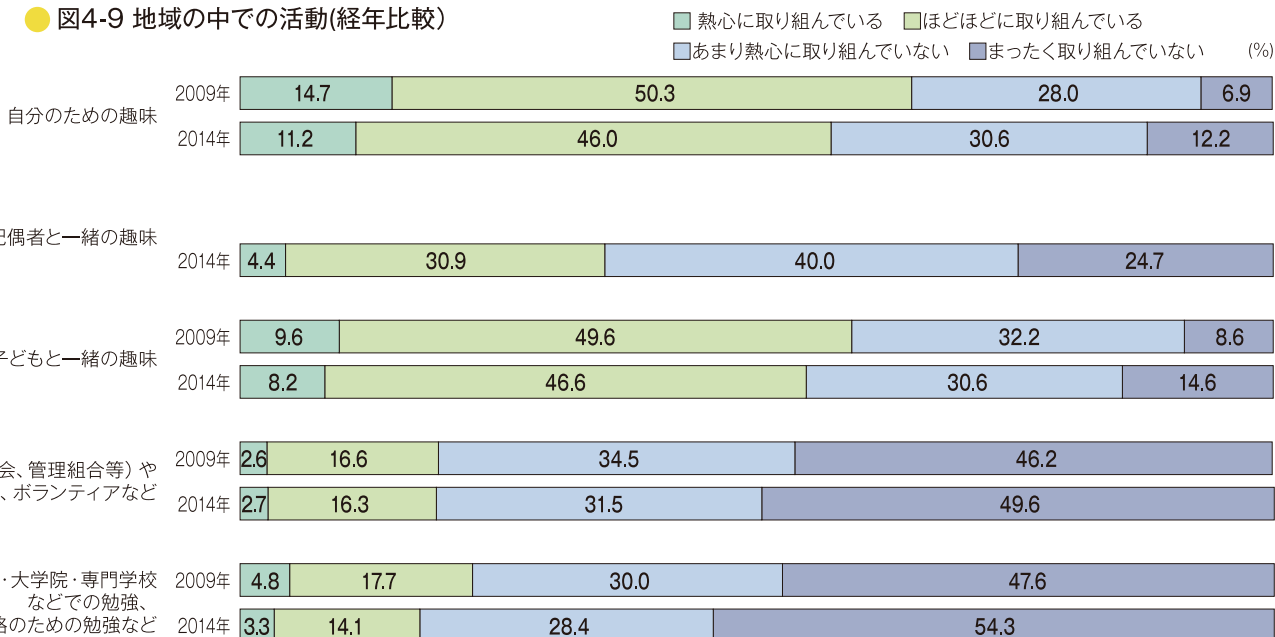
趣味や勉強、地域の中での活動

趣味や勉強、地域の中での活動は、経年で、全体的に減少。

取り組みたい活動は、「子どもと一緒に趣味」など家族との活動が高く、地域での活動は低い。

Q あなたは以下の活動をしていますか。

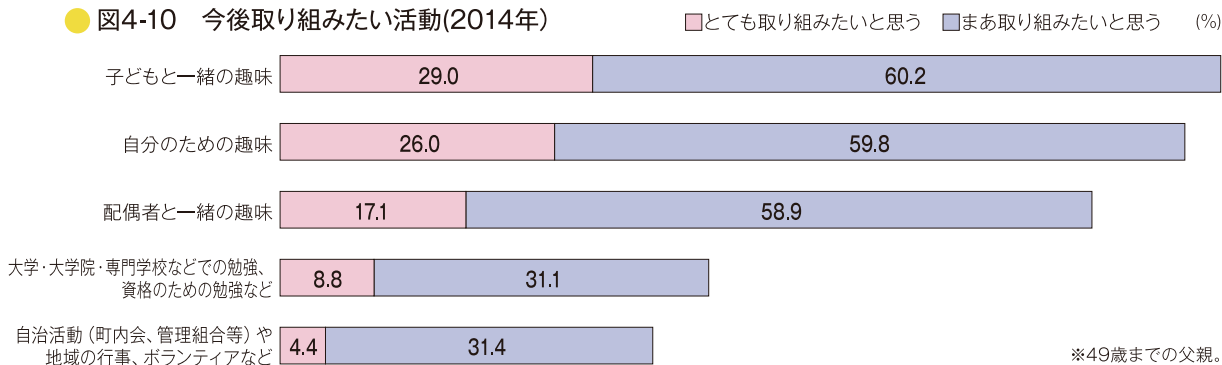
● 図4-9 地域の中での活動(経年比較)



※「配偶者と一緒に趣味」は2014年のみの項目。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

Q あなたは以下の活動について、今より取り組みたいと思いますか。

● 図4-10 今後取り組みたい活動(2014年)



※49歳までの父親。

自分や家族との趣味、勉強、地域活動などの取り組みはどう変化しただろうか。5年前と比べると、いずれの項目でも取り組んでいる比率が減った。

また、今後取り組みたい活動について聞いたところ、比率の高い順に「子どもと一緒に趣味」29.0%、「自分のための趣味」26.0%、「配偶者と一緒に趣味」17.1%だった。一方、自治活動は1割に満たなかった(「とても取り組みたいと思う」の数値)。17ページで分析したように、父親にも子育てについて話をできる友人が必要だと思われるが、組織化された子育てのための集まりを通して交流するよりも、子どもや家族と一緒に趣味を通して子育てについて話せる友人と 出会ったり、交流したりすることを望んでいるのかもしれない。

「子どもとの接し方に自信がもてない」からみえる現代の父親の静かな葛藤

今回の結果はやや複雑な日本の父親の置かれた位置と意識を表出したように思います。5年前同様「日本のお父さん、あなたはかわいそう」という気持ちにもなる結果なのですが、それだけでなく、みずからの生き方の方向性を模索しつつ、しかし自信がなかなかもてないでいる現代の父親の静かな葛藤のイメージが浮かんでくる結果でした。

「家事や育児に今以上にかかわりたい」という父親が6割近くになりましたが、この中には①現状でも育児をかなりやっているが、やればやるほど子どもと一緒にいたいという気持ちが強くなるので、もっとかかわりたい!という積極派の人と②子どもと実際にはかかわれないでいるが、やはりもっと子どもにかかわるべきだと思う、という反省派の人が含まれるでしょう。いずれにしても、現状の家族役割に満足していない父親は日本ではかなり多く、それを改善したいと思っている父親が6割近くいるということはしっかり確認しておきたいと思います。裏を返すと、日本の父親は、家庭人としての役割を変えたいと思っている割合が次第に高くなってきているということであり、家庭人としての生き方を模索している父親が多いことを示唆しているのだと思います。

しかし、このことと「子どもとの接し方に自信がもてない」という父親が4割近くにまで増えたということとの関係はどう考えたらいいのでしょうか。家事・育児をもっとやりたいと思っているのだが、育児をしようにも、かかわり方に自信がない、という父親が増えているのです。

私は、今回の調査で出たこの項目の結果が、今後の父親調査のヒントを与えてくれているように思います。「子どもとの接し方に自信がもてない」ということにはいくつかの側面があります。まず文字通り、接し方のノウハウがわからないという可能性があります。親は、子どもと接するとき、教育的にかかわる（何かを教えてやらねば、やりたいという姿勢でかかわる）場合と、遊び的にかかわる（一緒に遊びを楽しむ、子どもといること自体を楽しむ）場合が大別されますが、教育的にかかわる場合は、この子の将来に今はこれが一番大事というようなことが親の方にある程度しっかりと自覚されていなければなりません。しかし、これが今日難しいのです。社会の変動が早すぎて、自分が子どもの頃大事にしてきたことをわが子にも繰り返せばいいという時代でない。でも、では何をこそ、どう伝えればいいのか、ということとはなかなかいえない。それが自信のなさにつながっているわけです。遊び的にかかわる場合、別の困難が出てきます。今回アンケートに答えてくださった父親世代の多くは、幼い頃は自分の父親がバブル期で必死で働いていて父親に遊んでもらったという経験がとて少ないのです。しかも自らは、外で群れて遊んだという経験があまりないという初めての世代で、遊びというとゲーム以外はあまり豊かな経験がない人も多い。そのため、子どもと無邪気に遊ぶという身体が育っていない父親が多くなってきていて、幼い子と接しても、自然な関係で遊ぶことが苦手になっているわけです。だから「接し方」に自信がもてないというのだと思います。

「子どもとの接し方に自信がもてない」のは、さらに、子どもたちが生きることになる将来についての明確なビジョンが描けない父親自身の自信のなさということも重なっているように思います。これは現代人共通の心性だと思いますが、心の深いところで不安を強く抱くようになっていて、何をしても確信になりにくいという時代になっています。勤めているところが業績を回復してきていても、それがずっと続くわけではないということがわかっていますから、この不安はしばらく続くと思います。でも、そういう中で、確実に父親の育児・家事参加は広がっていて、この問題を次の次元にアップして、父親の育児や家事参加という窓枠から、家族、世間、世界、そして自分というものを、自分の目と感性によって見直すということが始まっていいと思います。父親調査が、社会の地域的なあり方を別の面から光を当ててくれるようになる時代なのです。

汐見 稔幸 (白梅学園大学学長)



自分らしい父親像を模索できる道か？見かけのイクメンか？ 父親支援の議論を

「育児をしない男を父とは呼ばない」という刺激的なキャッチコピーが大きな話題となり、男性たちを震撼させたのが1990年。それから四半世紀経って、父親の育児参加はある意味、当たり前のように世の中では受け止められています。現に「イクメン」はすでに流行語としては色あせた感もあります。ベビーカーを押して街中を歩いたり、子育てひろば等でこまめに子どもの世話をする父親の姿を目にする機会も増えていきます。年配世代、特に年配の女性からは、自分の子育て時代とは明らかに異なって見える夫たちの父親像に、半ばうらやましさを含めた賞賛の声も聞かれる昨今です。

しかし、こうした「いまどきの父親」の胸中は、外から見える姿とは異なって、実は複雑さを増していることが本調査から伺えます。つまり以前に比べれば育児にも家事にも随分とかかわっているし、かかわろうともしている。しかし、父親としての自信はそれに伴って必ずしも増加はしていないのです。むしろ、子どもにどうかかわっていいのかわりに不安に思い、妻からの期待にも果たして応えきれているのか等々、戸惑う父親像が随所に認められます。「一家の大黒柱として、毅然とした強さを持つ父親像」は微塵もなく、むしろ「自信なげに揺れ惑う父親像」が大半になっていると言ったらよいでしょう。

こうした変化は、しかしながら、けっして嘆かわしいことではないと私は思います。むしろようやく父親も生活者として、人として等身大の姿を正直にさらし始めたと言ってもよいのではないかと思います。換言すれば「父親の人間宣言」にもなりうる要素を含んだデータではないかと読みとりました。大切なことは、こうして揺れる自身の姿を隠すことなく、むしろ率直に見つめることではないかと思えます。そうしてこそ、真に自分らしい親像を模索する道につながるはず。周囲や社会もこれまでの固定観念を捨て、父親の自分探しの道をゆっくり見守る必要性も考えさせられます。

これまで久しいこと、女性は固定したあるべき「母親らしさ」にがんじがらめになって、ずいぶん苦しめられてきました。同じ轍を男性には踏んで欲しくはありません。父親として自信を持ってない現状に直面している多くの男性たちが、そこから自分らしい父親の在り方を模索できるのか、現実から目をそむけ、自信喪失のまま、見かけのイクメンを装って日常に流されていくのか、今こそ父親支援の在り方を議論し、施策等に移していくべき時ではないかと思えます。本継続調査の意義と醍醐味はここにあると思えます。

大日向 雅美 (恵泉女学園大学大学院教授)



父親の家庭や仕事、地域とのかかわりは社会全体のありようにつながる

妻や、周囲とのかかわりを中心に今回の結果を振り返ってみたいと思います。まず、8割以上の父親が子どものことを妻と毎日話す一方で、「妻に必要とされている」と感じる割合は前回に続いてさらに減少傾向にあること、「子どもともっとかかわりたい」と同時に「接し方に自信が持てない」父親も半分近く、といった結果から、色々な思いを抱えつつの父親の姿が見えてくる気がします。この背景にはさまざまな要因が考えられますが、忙しい日々の中でお互いの思いを伝えたり、相手の声に耳を傾けたり、ささやかな労いの言葉をかけあったり・・・、といった夫婦のコミュニケーションが、そう簡単でない現実もあるのではないのでしょうか。

一方で、今回新たに加わった「妻が仕事をする事」について、「家計」だけでなく「妻自身にとって」必要だと考える父親が7割以上いることにも目を向けたいと思います。自分の仕事と家庭のバランスをどうとるかは、父親自身にとってのみならず、妻との関係の中でも試行錯誤が求められるテーマであると同時に、その逆もしかりです。また、職業や親という役割にとどまらず、どのようなことを大切にどんなふう生きていきたいのか、といった広い意味での生涯設計が、男女を問わずこれからますます大事になってくるでしょう。

これに関連して、子育てについて話せる友人の存在が父親の子育て意識と関係する、という今回の結果から、さまざまつながりの中で支えられることが、父親にとってもとても大切であるということ再認識させられます。子育てや子どもを通じた出会いより、仕事上での関わりや過去の友人との関係が断然多いという特徴も、今の父親のおかれた現実からは頷ける結果です。子どもの成長とともに、地域をはじめ色々な形で父親の世界が広がっていくことは、父親の頑張りだけに期待する課題ではなく、社会全体で考えることであると改めて感じさせられました。

福丸 由佳 (白梅学園大学教授)



第3回 乳幼児の父親についての調査

● 調査企画・分析メンバー ●

汐見 稔幸（白梅学園大学学長）
大日向 雅美（恵泉女学園大学大学院教授）
福丸 由佳（白梅学園大学教授）
孫 怡（お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー）
高岡 純子（ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室 室長）
持田 聖子（ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室 研究員）
田村 徳子（ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室 研究員）
朝永 昌孝（ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室 研究員）

*所属・肩書きは、調査企画・分析時のものです。

- ベネッセ教育総合研究所のホームページから、本調査を含む、当研究所が行った過去の調査結果をダウンロードできます。

<http://berd.benesse.jp/>

- 「乳幼児の父親についての調査」の資料は、こちらよりご覧ください。

<http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4646>

- 引用・転載については、下記にてご確認ください。

<http://berd.benesse.jp/application/>

- お問い合わせ先

本調査に関するご意見・ご感想・お問い合わせは、下記までお願いいたします。

㈱ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

「乳幼児の父親についての調査」係

TEL:042-311-3390（10:00~17:00/土日・祝日除く）

第3回 乳幼児の父親についての調査 速報版

発行日：2015年7月31日

発行人：谷山和成 編集人：木村治生

発行所：㈱ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

企画・制作：ベネッセ教育総合研究所

〒206-0033 東京都多摩市落合1-34

TEL 042-311-3390

WEBサイト：<http://berd.benesse.jp/>

デザイン：古閑敦子

©Benesse Educational Research and Development Institute
無断転載を禁じます。